爲替相場表のみでなく、收穫の模樣、之を豫想する市場の價格、船舶の動靜、荷動きの模樣、夫等の電報は、彼等に取て最も著明に日々の商賣の基礎となるものである。現代の我等は實に國民財産の何十億萬をも、新聞の誠意正心の上に委して居るのである。平時に於ては、其電報欄の、實業に關係する記事は、其政治に關するものよりも遙に國民生活に取り重大である。故に此種の報道の遲速その正確不正確は、また總ての新聞紙の運命に關するものとなり、特に大新聞には其の榮枯盛衰に係はる大問題となつて居る。

數ふれば今から八十年前倫敦『タイムス』の巴里代表者は、大銀行者の一團に對して目論まれた奸人の詐僞的計畫を暴露した。之がため其の計畫は阻止されたが、其の結果訴訟事件となり、『タイムス』は遂に道德的の勝利を認められたが、一邊尼の損害陪償を拂ふべく判決された。而して其の訴訟費用は一千磅以上と計算されたのである。斯くして『タイムス』は、新聞として其爲すべき本務を盡し、世間に向つては少しも感

謝の要求はしなかつた。然し之に向て倫敦取引所其他に募金の企が起り、應募者頗る多く前記の損害額は之を償つて、殘餘を牛津（オクスフォード）、劍橋（ケンブリッヂ）兩大學の『タイムス』給費生の費用に向けた事がある。又『フランクフルター、ツアイツング』は、長期に渉り各會社の內容特に不良なる其固定資本勘定に對して、公々然嚴しい警告を加へた、之が爲め其の會社及び株主は勿論、一般社會に對し大いなる利益を與へたことがある。或は『キヨルニツシエ、ツアイツング』が、倫敦の詐僞商會の假面を剝いだ如きも、之と同樣の效果があつた。普佛戰爭後における所謂る泡沫會社時代の有頂天の歲に幾多の新聞は、其間に在て隨分不純な親切を行ふたこともある。然し今日では何れの新聞も、此種の誘惑に勝ち得て、記者は皆金錢問題には、絕對透明の地位に立たんことを期して居る。之は確言して憚らざるところである。勿論斯かる不純な問題は、大政治新聞には最も關係薄かるべきことではあるが、報道と商賣利害との境界が、頗る明瞭でない都鄙の小さな商業新聞には、時には少からず不光榮な出來事が今も成立するやうで

ある。

要するに新聞は、飽く迄も公開的な性質のものであるから、日々大取引所で行はるるところの巨額なる商品及び價格の交換に就ては、大に役立つものであつて、又之に對しては其頗る有力なる機關でもある。又新聞は政府の公債募集の時などに際して、國家の尊い救助者となり、時に財政及び經濟問題の理論的議論を立てて、國民的事業に執るべき其新しい道を指示するのである。

一〇　精神文化（ガイスチーゲクルツール）との交渉

新聞は其始めから經費の困難と戰ひ、長きに渉る强壓に堪へて、漸く前世紀の半ば頃から國民の精神生活の上に、從來とは全然異つた、一種の力を及ぼし得るやうになり而して漸次それが發展して、今日では新聞は國民教育の上に、最とも有力なる要素となつたのである。

然し現代人は、尙ほ好んで新聞紙を酷評する。新聞は薄ッペラである。薄ッペラな人々のために、薄ッペラな事を書く、眞の教育的努力に對して、『パンの代りに石を與へる』、思索の代りに贅語を吐く、事實を傳ふる代りに强辯を與へる、各人に間に合せ的な判斷を暗示し、人の才能を寸斷し、之を腐敗させ、俗惡下劣なる詞遣ひをして、尊むべき國語を毒するものである。と、以上の言には慥に少許の眞理はあるが、然し其うちには多くの不眞不正が含まれて居る。概括して云へば、新聞なるものは吾人の時代に必要なるが故に、必要物として存在するのである。決して狡獪なる國民の誘惑者でもなければ、又徒らに好んで讀者を翻弄するものでもない。彼等は確かに若干輕躁なる判定を屢ば提供する。然しながら、吾人は日々の生活に忙はしく、蝟集する塵烟一々之を拂ふの遑がない、又一々之を考察の裡に入るることも出來ない。そこで事件に對する大新聞の判定は屢吾人を助け吾人の觀念の構成に資すること少しとせぬ。思ふに現代新聞の精神的一般の水準は、必しも低いものと斷言することは出來ない從

つて今日、教育ある讀者からの新聞に對する要求は、或は多きを求め過ぎるのではないかと思ふ嫌もある。惡い詞遣ひの、誇大な言句の澤山が、百年前から新聞に見えた如く、今日でも事實教育ある讀者階級に見せるに値する新聞は殆んど絶無と云つて差支ない。然し吾等の時代に於ては辭句の美などは問題でない。唯だ新聞に要求するところのものは、明瞭な、正確な、眞實な事實であつて、決して之を言ひ表はす言辭ではない。而して最も其希望する所のものは、明確なる論據と的切なる判斷とである。

新聞の筆致が皮相的だといふ非難は、その根據甚だ薄弱と謂はねばならぬ。實際に於て大抵の人を喜ばせ、其の注意を喚ぶ所の新聞の形式と其內容とは矢張りこの皮相といふ種類のものである。故に斯く云ひ得る。讀者も亦大いに皮相である。彼等は唯だ皮相に新聞を讀み、皮相に新聞を評價するものであると。

新聞の文化的價値については、新聞と雜誌との間の境界を、次第に消滅させ始めたことを指摘したい。現代新聞の大多數は、科學的文學的價値のある論文に重きを置い

て居る。新聞小說亦然りである。小說は多く書肆に出版させる前に之を新聞に出して報酬と聲價とを二重に獲得する。事實新聞は書籍に對する報償を分擔するものである、之に依て其書の眞價を廣告し、その賣價を低廉にするのである。是に至て精神生活に對する、『フイユトン』の意義を考へて見ねばならぬ。茲は藝術批評の據り所で、之に依て劇や音樂の批評の普及が期待される。然し我等國民の精神生活の最も有力なるものは、殊に其の文學批評である、是等は寧ろ雜誌の領分であるかも知れぬが、然し近時日刊新聞のこの方面に對する集團的活動は、終に新刊書に對する良否の判決の實權を手にするらしく見ゆるのである。彼等の判斷は必ずしも正確なりとは云へぬ、從つて其の判決は、決して永久に向つて價値あるものではない。然し夫れは現代の國民の趣味教育のために、大いなる意義を有するものであつて。新聞記者は斯くして國民教育の一部に携はり、其筆が世人の信用を博しつゝある事を自負して居るのである。遮莫、多くの狀態の下に、特に教育の見地の下に、新聞は書籍の方へ歩み寄つて行かね

ばならぬ。或は此の傾向を輕視して冷笑する者もあるが、若し我が國民の教育水準が愈よ高くなり、他の如何なる文化國民と比較しても恐るゝを要しない時代が來たならば、其功の少からぬ部分は取りも直さず學校および新聞其物とそれが倦まざる活動とに歸せねばなるまい。

一一　獨逸新聞の將來

吾等は前項に於て近代新聞の成立は、經濟的に全然廣告の上に立つといふ事を言つた。現今に於ては、廣告利害の威力は、新聞記事の編輯態度の上に必然的に作用し、眞實の世相を表現すべき新聞本來の性質を沒却せしむるに至つた。一言にして云へば、新聞は益無色平面的の傾向を帶びて來て、其の結果卸賣的、工場的、倉庫的新聞營業を豫想するやうになつて來た。獨逸では未だ英米の如く甚しくはないが、漸次彼等に倣つて、所謂る『現代的新聞』となるべく、其の方向への進歩の途上にあるのである。

今日伯林の諸新聞は、外部から見れば個々別々のやうであるが、內部に在ては夫れが合同して、少數人の手中に歸して居る。卽ち『モッセ』、『シェルル』及び『ウルスタイン』の大經營を主として、他に二三の之に次ぐものがある。彼等は伯林以外、獨逸國の各地方に同一種類同一色彩の數新聞を表面無色の形で發行して居る。夫れは獨立した一個一個の新聞が、多方面から通信其他の材料を集めようとするには、餘りに多くの經費が掛り、單獨では到底その負擔に堪へられないといふ根本的の事實が斯くならしめたのである。

獨逸精神生活の一般的見地から云ふと、新聞はその本質として多種多樣であるべき筈なるに拘はらず、近來廣く一種の特性的な表現の仕方が生じ、又夫れに一種の抑制か加はつて來た、確實に事物を取扱はないといふ風潮が出來て居る卽ち一種の言論の壓抑である。政治機關は之がために脅威されて、政治的發表機關たる政治新聞は、斷へずその成立のために困難多き戰を戰はねばならなくなつて來た。近代政治の避くべ

からざる偏倚、誇大言說、黨派戰の放肆、無作法、煩瑣を怨視する精神的貴族者流は、この風潮を見て稍や心を安んじて居るやうである。然しながら若し今日の政黨と、その新聞とを嫌忌し、武力を以て之を排斥し得ると信ぜんと欲する人があるならば、夫れは確かに一の危險なる錯誤である。現代人は今や其の公的生活及び私的生活において、思想と主義の戰ひの上に立つて居るものである。卽ち國會的政黨は、取りも直さず此思想戰の民衆化のための機關である。而して新聞は、我等の行爲と生活とにまで、兩者の中間線を獲得する爲に缺くべからざるところの介在機關である。之が最近革命後に於いて一層其必要の度を增加するに至つた。若し政治の上に政黨の干與、卽ち其根本たる國民の干與が止めば、理論家と官僚政治家とは、其虛に乘じて大に漁夫の利を占むるであらう。斯の如くにして資本的新聞の政黨新聞を壓迫せんとするの形勢は獨逸の前途のため甚だ憂ふべき狀態と謂はねばならぬ。然し大勢から云へば、吾國新聞事業の行き着くべきその終末は、殘念ながら終に大資本的新聞企業の獨占に歸する

であらう。而して其の結果は、巨大なる權力を、少數の價値のない人々の手に收められ、新聞はその本領たる、自由なる多方面を失つて了ふであらう。此れは複雜なる世相を、强ひて單純ならしめんとするものである。元來自由なる複雜の中には、堅實なる文化の富が藏せられ、又た非常に有力なる矯正が、其內に伏在するのである。個々の新聞の各〻の偏執と不完全とは互に相對立し相反抗し、相融和して、茲に一國の精神文化を進め得るのである。

惟ふに新聞紙の大數發行といふことの中には、新聞の衰退の確かな危險が、橫はつて居る。新聞が努力勉强の結果として、多くの淺薄な讀者を吸集し、發行部數を增し、勢力を加ふるに至れば夫れに從て益その態度の上に公平を重んぜねばならぬ理由が生ずる。然し多額の部數を發行し、之を度外の安價で讀者に供給し得るは、今日の現狀では一に廣告の恩惠である。然るに新聞の公平なる態度が、この廣告の利害と一致することが出來なくなれば、廣告は直ちに其の新聞を去つてしまふ。廣告と、新聞の公

平な態度とが相協調し得るは、一の確かな鋭く引かれた界線内に止まるのである。然し新聞がこの境界線に達するとき、其上にも擴張を圖れば、忽ち損失を來す。詳言すれば、發行者は茲に至ると、其の新聞の環境を顧慮しなければならなくなる。廣告料を算用に入れない財政的關係は、讀者範圍の廣まれば廣まるほど、其の活動の餘地は益狹くなつて行く。從つて損失を避けるためには、自からその刷出高を減少して行かねばならぬ道理である。別言すれば、一の定まつた境界線からは、多く讀まれる新聞も、必要上惡くなつて行かねばならぬ道理である。何となれば、其の新聞は事件の重要とか、讀者の希望要求とかよりも、寧ろ單に廣告や新聞定價のことを主として考へるからである。

一方において新聞が、自ら破壞作用をして居ることも明白な事實である。政治新聞記者は、彼が書くよりも、より多くの事を知らねばならぬといふ、善き古き原則も、近代生存競爭の要求、又其想像的要求から、それが弊履の如く棄てられた。今の人は

其知れるよりも、より多くを書かんことを努める。新聞の新事件は、直ぐ忘れられるといふ經驗は十分に有つてゐても、感傷的記事には躊躇なしに力を入れる。概して世人は新しい事を、殊に皮肉な新しい事を思ふ。記者は先刻之を知つてゐて、若し新しい事件のない場合は、彼は之を神の名に於て製造するのである。記者自身としても、何等疑念を挾むことのない程、信用厚い人々からも、强て新しい新聞事件を造り出すのである。斯かる努力は如何なる結果を來たらすか、たゞ夫れは一般の公衆を墮落させ、而して公衆自身に取つても何等益する所のない、『新事件に對する饑渴』といふことを敎へるだけである。

以上の批評は較や酷論であるかも知れぬ。從つて一般的に之を適用することの出來ないことは自明の理である。廣い範圍から見ると、獨逸新聞の中には、忠實に、正直に、其の任務を盡して居るのも多數にある。政治新聞にして事實の眞僞を甄別し、正確なる報道をなして誤らないものもある。然し時代精神は概して新聞を、有害な方向

癒やすべからざる方向へ壓迫して行つた。這回の革命は、果して此の方面に一の轉回を來らし、經營に費用の掛かる無色の報道新聞と、眞面目なる政治新聞との二種に、新聞界が分裂することになるか否かは、我等の國民生活にとつて最も眞面目な將來の問題である。革命の結果として、より廣い階級、即ち婦人世界の贊否に現はるゝ政治論が、この行詰つた局面に、何等かの轉換を與ふること、必らずしも不可能でなからうと思ふ。而して此れは確かに願はしい事柄である。將來の政治には婦人の勢力は決して無視することの出來ないものである。

如何なる場合に於ても、新聞の素材となるべき種を、甚深の注意と、誠意、理會及び趣味とを以て選擇し、又篩ひ分け、其の論說、政治記事及び『フィユトン』は、眞面目によく吟味して、總べての方面に心を配り、國民の幸福を念とし、而して眞面目な考深い、表現を喚起する頭腦と同時に當世風の技巧ある書き振りをする新聞の存在は何人も驩迎するところである、斯樣な新聞は廣告に制馭せらるゝことなしに又其定價

の無法、不自然不健全な値下げをなさずして今日尙ほ相當有利な經營し行かれることと思ふ。小規模な組織で、社員の數の少い新聞社であれば一日に新聞一枚に付き十『ペンニヒ』の費用で、辛うじてではあるが其の經營を維持して行かれるといふ。故に此の善良なる新聞の立ち行くべき原理は確に贏ち得られやうと思ふ。惡い意味で云ふ現代新聞は、廣告のために利用すべく、月極讀者の多數を引寄せて、之を確かと捕へるため、性の惡い電報や、または大急ぎで作つた間に合せの論說や、誇大にした種を載せて終に自分で自分の生命の網を絕ち切ることになる。然し乍ら夫れには獨逸國民の敎養ある社會が、其の讀む新聞を選列する上に、自己敎育の實例を示すといふ豫想あつての事である。

之につけても吾等が文筆の高い職務を委任して居る人々に對しても、不斷の細心な鑑別選擇を忽諸にしてはならぬ。而して此人選が、兎にも角にも、大學で勉强した人の中から得らるゝといふやうになれば、其の敎案のうちに新聞を取入れた大學、高等

學校の當局者に對し、感謝の辭を呈せねばならぬ。新聞を、從來のままの狀態に放置しては、現代生活に對して、新聞の實際の意義を發揚して行く譯にはゆかぬ。到底新聞はたゞ彼等高等教育ある人々によりて改革され、其の文化史的又法律及び技術的方面に榮え行く發展を期待し得るのである。彼等は早晩新聞界の競爭場裡に進入し行くといふよりも、寧ろ一般公表から時勢を指導することを求めらるるといふ關係の方が、より强くなるのではあるまいかと思ふ。

新聞の發展のために戰はねばならぬ困難は、これまで世人は多く新聞事業の如何なるものなるかを知らず、又教養ある人士と雖も、之を律する國家の法規に對して、絶對的不知であつたことに基因する。而して此の不知が、自然に甚しく斯業の評價を困難ならしめ、又之れが新聞に對する憎惡の根元の一をなした。新聞に對する司法權と行政權とは、我等國民の名譽と幸福のために從來餘り力を致して居らぬ。元來懲罰と壓伏とは、少しも新聞を改善するものでないが、又輕蔑は正當に何物をも助くるもの

でない。新聞の向上、新聞業の地位の向上のため、其の當事者とともに提携して、其事に當るべき最大の責任を有するものは、政治家である。然し新聞改善の事は究竟するところ、悉く吾等の精神生活の最善が托せらるゝところの大學教育に歸すると思ふ。

新聞の改善は、新聞自らがやるのが確に一番善いのである。十分なる報酬及び病氣老癈に對する保障により、事業上の經濟的向上を圖るは、新聞自身がその道義的範圍において、自ら行はねばならぬところである。『憐れな鬼に、麗はしい教義を說教するのは無駄な骨折である』といふ古諺もある。一方又新聞の偉大なる意義又其享有する權力の驚くべき意義に應するためには、一般的教育要求の高調が可能であらう。現代の國民は今日恐らく藝術家よりも、より多く新聞記者に期待し、彼により高き人格的價値を與へんとして居るのであるまいか。

一二　新しい新聞王スチンネス

獨逸の君主獨裁政治は、カイゼルの殁落とともに滅びたが、昨今此國に新しい帝國主義が出現した、其の頭領を『フーゴー、スチンネス』といふ。彼れの仕事は、明けても暮れてもトラストである。彼はトラストの中に食ひ、生き、且夢想する。此れが彼の生命である。若し事業が合併せられることがあれば、獨逸人は之を稱して『スチンネジーレン』されたといふ。彼が取締役になつてをる會社が五十。財政的關係を有つ會社が數百。その工場の集團に使用する職工が七十萬人であるといふ。

彼は世の所謂る戰時成金ではない。又其の血にも人の言ふ如く猶太の血が混つて居ない。父祖は相當の富豪であつた。然し彼は決して普通富豪の家に見る驕兒の如きものではない。彼の流儀は『トラスト』を行つても、之を米國風に行るのでない。彼は何處までも自個單獨であつて、組合員を求めない。彼の型の人物は、大抵順序立つた方式に則つて、餘り掛け離れたことをやらないものであるが、スチンネスは頗る變つたところがある。彼は甲地乙地何處の定めもなく事業に着手する。墺國に鑛山を得、獨

逸で會社の合同を行ひ漢堡で船會社を併合し、スカンヂナヴィヤで商賣を始める。變幻出沒、其行動端倪し易からず、世人は何時も大分に時が經つてから、彼の行動の跡を知るのである。

戰爭中、獨逸の工業を軍事上の目的のため國有にしたのは、彼の獻策に基くものである。佛白兩國の鑛山を開發し、占領地の白國工場の機械を、獨逸に移させたのも彼の責任である。彼は戰爭最中、自己の商賣を一層手廣くし、其獲たる利益をもつて、運輸貿易業の方面に大發展を試みたのである。戰爭の尙ほ獨逸に取つて順調にあつた頃、彼は漢堡の獨米石油會社に加盟し、また漢堡の大『ホテル』數個を手に入れ、各地に商事會社を起し、不景氣時代には『バルチック』航海會社を自己のものとし、十二隻の航洋船舶を配下に置いた。彼は戰後の商業競爭は、自己の船舶によりて、自己の工場に原料を運搬するにありと信じたのである。

彼は戰爭中に於て既に今日の事あるべきを察し、東獨逸に廣大なる森林を買入れた。

此れは自己の鑛山の抗木及び其他の事業に用ゆるためであつた。戰爭の將に終局を告げんとするとき、彼はライン地方の褐炭採掘業の『モノポリー』を得た。實に恐ろしい先見であつた。獨逸慘敗の結果は、講和條約履行のため石炭の採掘高減少し、褐炭は硬炭の代用品となつたのである。戰爭の終結は、何れの方面の同業者にも失敗と挫折とを來らしたが、スチンネスのみは、此れが富と權力への大飛躍の把子となつた。漢米汽船會社長バルリンの如き人さへも、其の一生の事業である海上活躍の覇圖を粉碎され、失望の極自殺した。スチンネスのみは他人の失敗の跡から勝利を引攫つた。革命が起つて『ホーヘンツオルレルン』王家が瓦解した時、彼の大いなる經濟組織は完成された。彼れは王政仆れた獨逸國に於いて、一躍實業界の覇者となつたのである。

平和條約の調印は、竟に『トラスト』の時代に入らしめた。事業合同に對するスチンネスの天才が現はるゝ時が來た。勿論『トラスト』觀念は、獨逸でも決して新しいものでない。戰前古くから、所謂る水平線的合同はあつた、夫れは同一の生產製造に從事

する數個の工場を、一個の管理の下に集めるのである。例之ば電氣機械『トラスト』、『ポッターシユ、トラスト』及び染料化學工業『トラスト』の如きが夫れである。此種のトラストが自給的のものでない一例を擧ぐれば、譬へば其の燃料は必ず外部から取入れねばならぬ如きもので卽ち米國『スタンダード』石油會社や、『インターナショナル、ハーヴエスター』會社のやつて居る流儀のものは之に屬する。

スチンネスの始めたものは、此樣な水平線的のものでなく、垂直線的のものである。原料の生產から、其の仕上げ品の輸送配給の末に至るまで、製造品の連續的一切の段階を代表する、完全にして且つ自給自足の機關の合同である。卽ち土地から消費者へまでの、各『プロセツス』の一切を掌握するのである。

スチンネスが案出した垂直線的合同は、舊式の米國的『モノポリー』とは、實質上において全く異つたものである。舊式のものは稍語弊があると思ふが人之を喞つて章魚といふ。卽ち其足が多く其足の及ぶ範圍が廣く且つ其貪慾なるところは章魚に類する

といふのである。其爲すところ要は商賣の制限にあつて、或は賣價を『コントロール』し或は競爭者を壓倒し、常に其犧牲となる者は、小商人や消費者である。

スチンネスの强い合同事業の背後には、動力卽ち機械の車輪を動かす原動力が伏在して居る。これは現在獨逸の燃料缺乏狀態から來て居る、動力問題さへ解決さるれば、他は皆な比較的容易なる問題のみである。此れでスチンネスと、其の仲間は競爭を恐るゝ要がないことになつて居る。彼等の成敗は、唯だ獨逸が經濟的に回復することの上に繫つて居る。而して其れが實現に最も確實なる保證は、工業を盛んならしむる一事の外無いのである。

スチンネスの垂直線的『トラスト』觀念の最も簡單な、最も分り易い說明は、彼れの新聞『トラスト』の例である。最初彼はその事業について、專門的調査報告の根本を、『コントロール』する必要から、紙の事業に手を染めた。次で半官報の名の高かつた、『ドイツチエ、アルゲマイネ、ツアイツング』を買收し、更にミュンヘン其他の都市で、

盛んに新聞を買入れた。彼は其新聞の中で、儲からないものあるのを見て、其の原因を研究して、紙の直段の高過ぎることを發見し、製紙及び『パルプ』工場を買收した。次ぎは『パルプ』の缺乏を知つて、盛に山林を買ひ込んだ。更に新聞事業の第二着手として、電信を輸送する電信會社を買收し、更にまた幾多の通信社をも手に入れた。而して終に獨逸最善の二個の印刷出版會社を獲得した。斯くして彼は處女林から、新聞雜誌書籍と成るに至る迄の、一切の機關を『コントロール』して居る。

現在獨逸を旅行する人は、其乘る汽船、電車その宿泊する大『ホテル』、其讀むところの新聞紙、其食ふところの食物、その需要品を購ふ各種の店舗、その兩替する銀行夫れらが、悉くスチンネスの所有にかゝるものでなければ、必ず其關係する所のものであることを知り驚くのである。

その詳細を擧ぐると、優に一部の書籍をなす位であるが、彼は一昨年から昨年にかけて最も力を致したのは、『トラスト』の『トラスト』を拵へる事であつた。彼は其の大

規模なる鑛山會社を他と合同して、『ラインエルベ、ウニオン』を造つた。之に從事する人員六萬人である。彼は更に『トラスト』を、『ライン、ウエストフハーレン石炭シンヂケート』と合同した。此の會社の、一ケ年の石炭採掘高が、一千萬噸以上である。彼は更に手を擴げて、石炭鑛、金屬鑛、鎔鑛所、鐵工場、電線製造所を兼併した。獨逸敗戰の結果として、此うち唯だロレーン州の鑛山を失つたが、彼は今日では、獨逸に於ける採鑛冶金事業の、最大最强の『トラスト』を造つて、事實上その主權を握つて居るのである。

彼の大望は、決して以上のものでは滿足させられない。彼は將來の工業の大部分は、電力使用に傾くべきことを信じ、此れが世界燃料問題の解決法であると見た。爰に於て彼は、『シーメンス、シュッケルト』會社に着目した。『シーメンス』と『アルゲマイネ電氣會社』とは、何人も知れる如く、獨逸に於ける二大電氣會社である。而して常に互に競爭の地に立つて居るのである。『シーメンス』は水平『トラスト』である

から、燃料と原料とには遺憾を感じてゐた。スチンネスの力は之れと結び附き、爰に『シーメンス、ラインエルベ、シュッケルト、ウニオン』が成立した。此の大『トラスト』は米國の『スタンダード』石油や、『U、S、スチール』會社に比し、更に大規模な、一層完全なものである。此の大『トラスト』は、一面は事業會社であつて、一面は株持會社である。現在使用する職工のみでも、二十二萬五千人と稱して居る、其の大規模なることは此の一事でも十分に察知し得らるゝ。

彼の事業は、今瑞典、璉馬、伊太利、西班牙から南米にまで及んで居る。而して最近蘭領印度に手を延ばさうとしたが、之は一寸不成功の形にある。昨年十一月、ノースクリフ卿が、東洋漫遊の不在中、彼は倫敦を訪問して、ロイドヂョウヂと幾度かの會見を遂げた。之は獨逸の償金支拂方法に關する事であるとも言はれ又露國の開發に關し、英米と提携する相談のためであつたとも云はれて居る。彼の事業慾は、英米露の三國に向つて居るのは事實である。彼は昨年佛國の石炭と鐵との工業に向つて、實際

的協同を計畫して居るといふ流說があつた。又往年倫敦會議のとき、彼は佛軍の『ルール』流域侵入を驩迎したといふ事である。夫は佛人の入來は、その地方の工業經營上から、自己に都合のよき條件をもつて、敵國人と商議し得ると信じたからだと云はれて居る。

彼は今荐りに露西亞の研究をして居る。彼は露國に對し獨逸の經濟的干涉は、兩國のために必要であつて、且つ之が兩國の幸福を將來するものだと信じて、夫れを公言して居る。實際彼は赤旗の倒れる日を待つて居るのである。

彼は座談に長せず、演說に拙く、容貌風采少しも揚らない。然し唯だ人を恐れず、權威を恐れず、其言はんと欲するところを言ひ、其爲さんと欲するところを爲すのである。曾て彼は『スパア』會議に、獨逸代表者の石炭顧問として出席した。其時彼は草稿を朗讀して獨逸の炭況を報告し、然るのち聯合國殊に佛國を指して、戰勝の餘威に乘じ、不治の貪慾病に罹りつゝあるものと言つた。此時議長は勵聲して、降壇を命じ

たがスチンネスは草稿から其眼を放ち、議長を見上げて斯う答へた。『私は儀禮の辭を述ぶべく玆に登壇したのではない。』と、彼は確に彼の言の如く決して慇懃なる人ではない。彼は何處までも無遠慮に突進する人である。

彼は獨逸國內において、現に六十幾つかの新聞を有つと言はれて居る。而して彼は此の文明の大利器を、十分に利用する方法を知悉して居るのである。彼の富は安い馬克で計算して、果して何程の高に上るであらうか。恐らくは獨逸人の未だ曾て人の富として聞知した事のない、驚くべき數字であらうと思はれる。

彼は何處までも獨裁主義の人である。國內に於ても、國外に於ても、經濟上の道理を眞向に振り翳しつゝ、傍若無人に行動するのである。彼の畢生の望みは、『カイゼル』を復活させる事にあると或者は言つて居る。彼は今政黨に屬し、議會の人となつて居る。『獨逸議會要覽』には各議員の經歷が載つて居る。其文句は何れも推敲を加へたものであるが、スチンネスのは頗る簡短無造作に次の如く誌してある。

『スチンネス、名、フウゴー、一八七〇年二月廿二日生。ミュールハイム(ルール)。ミュールハイム及びワイスヨルムにて商業を營む。區ウエルダ。國民黨(フォルクスパルタイ)。福音派。』

唯之のみである。彼の志決して小ならず、其巨腕は早晩必ず極東にまでも延びるに相違ない。否、今や其のシーメンスと我が古河鑛業會社とは已に事業上提携の約成立したといふ事である。何にしても茲數年のあひだは彼の活動は目醒ましいものであらう。

一三　新聞紙の社會化(ゾチアリジールング)と廣告國營論

獨逸は學問の國であり又議論の國である。平時に於てさへ侃諤の論の隨分多い獨逸が、帝國の覆沒から社會黨の天下となつてより、祖國の運命、經濟上の恢復、多數民衆の康福の如き大問題に關し盛んに眞劍な思索、眞劍な研究が行はれ、それが雜誌、書籍、小冊子等に載せられ續々顯はれる。新聞問題亦決して其例に漏れず、上來說き

來つた種々の事實から出發して、終に新聞社會化なる說が現今識者の間に頗る有力となりつゝある。

現代の新聞紙は皆な營利を目的とする。隨つて營業としての新聞が算盤づくから爛んに賣買されるやうになり、其結果富人のみの關係し得る企業となつた、之れを匡正せねばならぬ。之が新聞社會化說の唯一の根據とする理由である。

尤も此說は今日に始まつたものではない。既に古くかのラッサッレも『社會民主主義の國では一切の新聞が禁止され、之に代はるべきものとして國家又は地方團體から公報の樣なものを發行し、之に據てのみ時事と公告とを知らしむることゝせねばならぬ』と云つた。既記の如く米國に於ても『シンクレーア』などが今此說を唱へて居るのである。然し社會主義の實行が既得の財產權を如何に處置して公平を維持し得るかといふことが其難關である如く、新聞紙の社會化說にも既設新聞の營業權を如何に處置すべきかの難關が横はつて居る。

ソコで既設の新聞には政治新聞は斷じて私有することを許さず、唯非政治新聞のみ其存立を許すべしといふ議論がある。之に對して、夫れは國民の口を箝し其耳目を奪ふものであるから、夫は決して新聞社會化の眞精神に副ふものでないとの駁論が起つて來た。

又斯ういふ說がある。國家的中央報道新聞といふ樣なものを造り、一切の事實の報道の出版は議會の監督の下に置き、各地方は地方的報道と廣告とのため其地方版を作らせる、而して猶ほ殘存する私的經營の新聞は、新聞を記載し廣告を受くることを禁ぜられるが單に組合組織を以て政論を發表する政治新聞としてのみ其存在を計すべしといふのである。

『現代新聞の惡弊を助長せしめたものは廣告である。廣告は新聞を毒し、新聞は社會に福利を與へず却て之を毒するものであるから其本源たる廣告を國家獨占の事業とせねばならぬ』此說も決して新しいものではない、然し此說にも亦多くの理由から異論

がある。從て其中間說として一切の廣告を二分し、商品、勞働、住居、金融市場、國の布告等は地方團體で發行する新聞に獨占せしめ、家庭、劇場、書籍出版の廣告は之を營利新聞に分讓すべしとの說もある。

萊府（フライブッイッヒ）の國民經濟學者『カール、ビーヒェル』博士は從來屢ば新聞に關する議論を發表した人であるが、最近其公けにした新聞社會化說の精神に基く法律の私案は廣告獨占の制度を立て、之を國家及び地方團體の有に歸せしめんとするのである。博士は曾て此案を『ミュンヒェン』會議政府（レーナレギールングヘ）へ提議したが竟に採用されずして止んだと云つて居る、其法案は左の十個條である。

一　人口二千五百以上の各市町村は其地方團體役場より其新聞紙を發行し每號出版後直ちに無代價にて全戶に交附さるべし

二　此新聞は人口二千五百乃至五千の地方にては一週少くとも二回、五千以上一萬の地方にては四回、一萬以上の地方にては每日發行するものとす

三　此新聞は專ら國及び地方團體の布告の公布並に地方的意義の私的廣告を揭ぐ

私的發行所より發行する新聞には廣告の如何なる轉載をも之を禁ず

四　廣告の料金は地方の習慣に從ひ之を定む、然れども從來其地方に發行せる新聞の料率を超えざることを要す

五　地方團體の新聞は廣告以外、一の本文部を有し、新しき新聞（ニウス）の發表および教訓的娯樂的の事項に限り之に掲載し、各種政治的權力の目的ある記載は全然禁止さる。然れども其土地の他の新聞よりの轉載は禁止せず

本文部の内容は國の布告と同樣之を新聞の印行に附する前、原型、紙型又は印刷物にて官廳の檢閲を經べし

地方團體の事件の投書は何時にても之を受附けざるべからず、其記事が罰則に觸れざる限り必ず次號に於て之を公にすべし

六　地方的意義の廣告中商品及び勞働に關する廣告が、家庭的廣告よりも遙に過剰なるべきを以て興行的集會の一切の公示は之を尊重することを要す

七　私人の發行する一切の官報（アムツブレッチル）類は此法律の施行と共に廢止さる

八　他の市町村に屬する者が此新聞を購讀せんと欲すれば、生産原價に相當する購讀料の支拂により郵便により之を受くるを得べし

九　數個の小さき地方團體は縣廳の認可を受くるときは共同して一個の團體新聞を發行することを得

他の新聞紙が此新聞紙に掲載せる官廳の公告及び報道の轉載をなすには市町村役場の許可を得、相當の手數料を支拂ひ許可さるゝを得べし

十　以上の法律の規定に背く者は何馬克より何馬克迄の罰金に處し、之が反覆の場合には一ヶ月以上の禁錮に處す

今の歐露政府は既に廣告の獨占を實行して居る。それは定期の刊行物に出す廣告、廣告目的の印刷物、掲示、貼り札の受授を禁じ、一切之れを國家の獨占にして居るのである。それは彼等の政治上の主義といふよりも便利の上から實行して居ると見るのが至當であらう。斯の如く新聞社會化の實現には新しき暴君の出現に對する嚴しい戒心が必要である。

佛蘭西

一　歐米斯界の一瞥

佛國の斯界を論ずる前先づ廣く歐米斯界の上に概觀を下す必要のあることを覺ゆる。

米國の新聞は、同業者の競爭最も激烈で、榮枯盛衰が甚だ速かである。夫れは其の國狀の進歩して息まない狀態に最もよく相當して居る。概して『ニウス』の蒐集には頗る努力し、優秀な材料に富むで居る。從つて時としては新聞種を、勝手に拵へる如き弊に陷ることもある。記者も探訪も、極めて機械的で、主筆と探訪との間には幾段の階級が横はり其間隔が有り過くる。之がため、有力な探訪は時々不平を起して、甲社乙社と轉々することは、何れの國の新聞よりも頻繁であるといふ。國民の氣風として專門學者の說を輕侮し、銘々勝手々々に事を考へ、且つ言ふことを欲し、他人の說などには餘り重きを置かない。故に新聞は論說よりも記事に注意を拂ひ、記事の間に批評

や『プロパガンダ』を挿む。紙幅も較や尨大で、且つ頁數が多く、記事も豐富である。其の上多忙の人人に讀ませやうとする必要上、その記事は勢ひ『センセーショナル』に傾いて來るのである。東京の新聞の活動寫眞の廣告に使ふやうな、太い特別製の活字で見出しを附けた感傷的な文字は、米國でも主として西部加州邊から、市俄古までが酷だ多く、華盛頓、費府、紐育と、東に行くに從つて、次第に夫れが著しく少くなる。之は活字だけの話で、記事は一般を通じて、較や冗長で、甚だ煽情的であると評して謬らないやうに思ふ。

英吉利の新聞は、何と云つても古風な面影が何處かに殘つて居て、未だ寫眞版を入れないのを誇りとして居るものさへある。記事は米國の夫れに比し、正確の度は大いに勝れて居る。中には米國の影響を受けたものも無いではないが、一體に堂々たる態度を持し、記事論說ともに悠揚莊重の趣を見せて居る。米國では記事を重んずるが、此國では記事よりも論說を尊重する。從て隨分有益な、而して公平な好い論說が現は

れる。記者は米國の如く商賣的でなく機械的でなく、そこに常に若干の餘裕があり、多少の道樂氣分（アマチュリッシュネッス）がある。要するに英國の新聞及び新聞記者は、何と云つても獨立不羈の風格に富んで居るのは確かである。

所謂大陸風、卽ち佛蘭西伊太利の新聞紙は、記事論說ともに總て簡潔に出來上つて、署名された論說は、概して甚だ重ぜらるゝのである。其の結果『ヂャーナリズム』は野心家の踏み臺となり、流星的人物の機關となり、新聞夫れ自身の繼續的勢力の根本たる、堅實なる品性に背反するやうな事をする場合もある。大陸新聞の長所としては頗る高き文學的標準を保持し、多くの問題に就て、藝術的批評の最良質のものを世に提供することは、一般に認められて居るところである。世界中佛蘭西國の如く、音樂文學、藝術及び劇の領域において、新聞記者に由つて振はれる權力ほど大いなるものは、何れの國にも見出し難いところである。實際教養ある公衆によつて、夫れが重んぜられるのは夫れが好良である爲めである。又公衆が眞面目に之を取るから、必要上

好良であらねばならぬのである、此點は米國は勿論、英國でも全く企及し難いところである。

獨逸は外觀上、佛伊兩國の式と比べて大差はない。其の較や異れる點は、署名した論說の效力が、佛伊に比して甚だ薄いことである。從て新聞其物の本質は、之に準じて價値が多いとも云ひ得られる。然し其の藝術的批評方面は、佛伊の標準よりも著しく劣つて居るのは、爭はれない事實である。然し唯一つ彼等の優越した一の領土がある。夫れは眞面目に崇敬の心を以て、科學及び學問の一切の事項を取扱ふ點である。之に反し政治、經濟、財政關係の事項は、甚だ見劣りがする。猶ほ仔細に觀察すれば米國風の商賣主義の弊所惡所と共に、遺殘する鐵血主義の弊所惡所を兼ね備へて居る上、獨立の風格乏しく、權力の脚下に奔らんとするの氣味がある。『ニウス』の蒐集に就ては、通信種に依賴すること餘りに多く、佛國に比し勉强の程度足らず、又總てに於て計畫的ならざるを其の缺點とする。

歐洲大陸を旅行する人は、誰も心附くところであるが、獨逸各都市の新聞雜誌店頭に、最も多く見掛ける外國の新聞雜誌は、維納の『ノイエ、フライエ、プレッセ』、倫敦の『タイムス』、大陸版の『デーリー、メール』、米國の『レディス、ホーム、ヂョウナル』(月刊雜誌)、巴里の『プチ、パリジアン』、『プチ、ヂュルナル』等である。伊太利では之に獨逸の『フォッシッシエ、ツアイッング』、『フランクフルター、ツアイッング』、『フォルウェルッ』(社會民主黨の機關新聞)などを加へたもの、而して巴里でも亦略ぼ其通りであらう。勿論茲では『プチ、パリジャン』などは自國の新聞であるから、此の側から除外されるのである。國が隔つてゐても交通機關が整つて居るから、外國の新聞紙もその當日か、遲くも其の翌日に觀ることが出來る。

倫敦『タイムス』は毎日大抵二十頁位で、紙幅は東京朝日に比して縱三寸横二寸位廣い。獨墺のものは概して『タイムス』や『マンチエスター、ガーヂアン』の丁度半分位の大さである『フランクフルター、ツアイッング』の如き一日三回版を出すものは之

を併せると十四頁又は十六頁位となる。伊佛のものは獨墺のものよりは稍や大形で我が時事や日々の紙幅に比べると縱一寸五分横一寸位廣いのが通例である。何處の新聞紙でも日本の樣に欄外を使用したものは見たことが無い

佛伊の新聞は殆んど皆な四頁、而かも其の活字は英米のものに比べて遙に大型で頗る讀み易い。伊國のものは殊に重要記事の見出しは米國西部の新聞に見る如き思ひ切つた大きい活字を並べることもあるが、佛國のものは決して業々しい見出しなどを使はない。而して限られたる四頁の中に家庭欄も廣告欄もあり、且つ其の記事は頗る精選されたもののみである。毎日の生活に忙はしく慌しい英國や米國の新聞が、普通二三十頁もあつて、稍暢氣さうな國柄の伊佛の新聞が、四頁本位であるのを見ると、誰しも何かの暗示か諷示かが其所にあるのでないかと考へてみたくなる。

倫敦『タイムス』が前記の如く約二十頁で、その一枚賣りが三片(約十二錢)、『テレグラフ』、『ガーヂアン』共に二片、紐育『タイムス』が二十四頁乃至三十二頁で二仙。其

他主なるものも大抵皆二仙(四錢)。伊國新聞は大抵二十參(サンチーム)で、佛蘭西のものは『ルタン』、『リュマニテ』等の二十參(サンチーム)を例外として、普通は十五參(サンチーム)(二錢二三厘)である。此の一枚賣りの事については、日本の部に於て後に評論する積りであるから特に茲に述べて置く。

二　佛蘭西文化の精華

巴里は佛蘭西である。巴里を觀れば佛蘭西の文化を知ることが出來る。由來伯林と巴里とは世界中最も多くの新聞紙を有するところである。然し其の新聞が有力で、而して發行部數の多いことは、伯林は到底巴里の敵でない。伯林の日刊新聞は現今總計三十七で、うち十六が毎日二回以上の發行である、茲では日本の如く朝刊新聞で夕刊を發行するものが多い、巴里や倫敦では朝刊新聞と夕刊新聞とは大抵必ず別個の經營である。巴里の朝刊『プチ、パリジャン』の如き、發行高百五十萬と稱し、或は二百萬

ともいふ。『タン』の東京通信員メーボン君は、百五十萬位のものだらうと觀測して居るが、最近諸種の記述は、多く二百萬説に傾いて居る。巴里には百萬以上を出して居るものが此の外にまだ二つある。今日の巴里新聞の一日の發行高は、八九百萬に上る計算であるが一八六六年にはそれが總體で僅に三十五萬に過ぎなかつた。其時分此中で夕刊新聞『プチ、モニトール』が十三萬を占め、『フヒガロ』が此の年漸く日刊新聞として世に出でたばかりであつた。夫から六年を經て一八七二年(我が明治五年)には、『プチ、ジュルナル』が二十一萬を發行するやうになつた。此新聞は一八六三年の創刊で、永く新聞界の覇を稱へて居たが昨今『プチ、パリシャン』に征服され、其位地を奪はれたが、今日まだ百萬部を保持して居る。

一九〇〇年(明治三十三年)には、巴里市中に二百四十の新聞があつたといふ、詳細なる數字を知ることは出來ぬが他の例から推測して多分、其の半數位が日刊であつたかと思はれる尤も此うちには非政治新聞と政治新聞とを合せ含んで居る。四五年以前には、巴

里の日刊政治新聞は約六十と稱せられたが、昨今は夫れが少しく減少して、總數略ぼ五十位のものであるやうである。

紙幅は概して日本のものよりも心持ち大形ではあるが、略ば同型と云つて差支なく『タン』と、『エクセルシオル』（之は紙幅も特別に大きい）の六頁を例外として、他は悉く四頁である。而して其第一面は論說及重要雜報であつて、論說は無論、記事の重要なものには、記者の姓名を記し、或は單に其の頭字のみを入れたのもある。寫眞版は大抵第一面に收め戲畫は第一面又は第二面に入れる。第二面は所謂る雜報で、フイユトン欄は必ず其の底部に在るのが常である。第三面には『最終時』と稱する締切間際の最新事件を收錄し、之を以て各お互に烈しい競爭をして居る、其の一方に小さく取引所（ブルス）の相場欄があり、（無いのもある）殘りの半分は廣告で、第四面は全體廣告に用ゆる。而して欄外といふものは一切使用しない。之が巴里の新聞紙の共通した一定の型である。

『フイユトン』は大抵小說である。日本の新聞紙は、小說の人氣を得たのと得ないのとで、其賣れ高に約二割の增減があるといふが、巴里では小說が一つ當れば十年間聲譽の維持が出來るといふ。一般に文學と政治論が尊重され、購讀者も亦十分之を鑑賞咀嚼し得る敎養を有つて居る。巴里では今日でも、新聞關係者にして議政の衝に當つて居る人が相應に多いのである。又文筆にたづさはる人々は、先づ新聞紙に其の筆陣を張つて名を知られ、新聞記者は世界何れの國よりも、最も多く世間の尊敬を受けて居る。記者が新聞によりて重さをなすよりも、新聞が記者によりて重きをなすの觀がある。

戰爭前までは、巴里の新聞紙は大抵六頁であつたといふが、今日は前に述べた如く殆んど皆四頁になつて居る。佛語は元來頗る簡潔な語である上に、頁數の少い關係から、新聞の文字は又極めて洗鍊された名文が多く、一般に簡捷敏活が尊はれる。而して新聞紙其物の名の如きも、他國のものに比し、極めて簡短で呼び易きを常とする。巴里の多くの新聞は、大抵その主義主張を有し、明瞭に之を標榜して居る。新聞の

表題の傍に、何黨何派の機關といふことを掲げたのもある。而して或る偶發の事件によりて多くの新聞が甲乙の二派に分れて論爭することがある。往年の『ブランゼエ』事件の如き、『ドレフユー』事件の如き其著しき例で、當時『ブランゼエ』派と非『ブランゼエ』派、『ドレフユー』贊否兩派互に相對峙し、國内の論壇を賑はし、人心を騷がせたのである。而して此種の論難攻擊の文字は、相互に頗る痛烈を極めるのである。時として名士の不正事件を摘發する如き場合には、其痛烈さは極めて徹底的である。先年『タン』が、時の大藏卿『カイヨー』を嚴しく論責した。『カイヨー』夫人は之を怒り、『タン』の主筆を銃殺して、良人の仇を報いた事がある。之は一例であるが、一般に新聞の記者も其の讀者も、新聞に對して非常に眞摯な考を有つて居る。

英獨や米國に見る如き新聞『トラスト』は、佛國にはまだ其の萠芽が見えない樣である、最近『プチ、パリジアン』の目醒ましい發展に對し、同業者の嫉視は之に種々の難癖を附けようとして居るらしいが、此の新聞紙とて決して『トラスト』の如きものでな

い樣に思ふ。唯だ同じ經營の下に、『エクセルシオル』といふ寫眞版を、思ひ切り多く入れた婦人向きの新聞一つを發行して居るのみである。既記の如く、一時百を數へた日刊新聞が、昨今政治新聞としては五十内外に減ぜんとして居る狀態である。近代の新聞紙は、何處に在つても大資本でなければ、經營が不可能である。別言すれば世界を通じて今の新聞は、皆資本家の經營して居るものである。世界一の新聞紙の都巴里でも矢張り資本家の新聞のみが最も麗しく華いて居るのである。

然しながら英米の如く、獨逸の如く、新聞が『トラスト』や、『シンヂケート』の手に兼併さるゝものの多い今日、互に獨立した筆陣を張り、正義を論じ、文化を說き、其の存在の必要上、兎に角彼等の信する眞理をのみ目標とする新聞紙の多い點は、巴里人の誇りであらう。又英米の如く、編者も讀者も、何を書いてあるのか、相互に分らないやうな、數十頁の大附錄を添へたり、平日でも二三十頁の尨大極まる、不便な新聞紙を提供して、讀者も新聞社も平氣で居る如き、非文化的新聞の多い世の中に居て、

繁劇な世間に、簡短明瞭な報道を與へるべく、互に勉强して『ニウス』を詮索し、餘り通信社の通信なるものに力を假らず、通信業に發展の望みを與へないところの新聞に對して、吾等は贊嘆の辭を惜むことが出來ぬ。彼等は頁數の少い關係から、廣告の蒐集に左程の苦心をしない。其の必要が少いのである。故に又他國の新聞の如く、廣告の下に屈從を事とする必要がない。彼等は唯善良なる新聞紙を社會に提供し、品質を以て他の新聞紙と競爭すれば善い。彼等は街頭の一枚賣りを、其の主なる顧客とし、其の生命とする。顧客は其の好惡に應じ、其の善惡を判斷して隨意に購求する。而して其販賣機關は、辻店であり箱店であつて、其の組織は徹底的に簡易である。仔細に巴里の新聞紙を精査し、之を批評すれば、ソコに多少の缺點は發見し得らるるであらう。其甚しい通俗化(ヴュルガリザシオン)の傾向と記者の教養の不相當なども著しい缺點に相違無い然しながら著者は、獨り此の佛蘭西の新聞に於て、理想に近い新聞を見る思をするものである。

三　巴里の新聞紙の一々

以下主なる巴里の新聞紙を列擧してみる。就中發行部數は、各社の秘密とするところであつて、其の詳細は外間から窺知することが出來ぬ。爰に掲げたのは唯だ若干根據ある想像數であるが、矢張り浮數である。其の一部賣りの代價を缺くものは私の蒐集に洩れた分である。十五參(サンチーム)は邦貨にして約二錢二三厘、二十參(サンチーム)は約三錢と見れば大差ないであらう。

1　Le Petit Parisien『小巴里ッ子(ルプチパリジアン)』

主義　保守的共和　發行高　百五十萬　一枚　十五參(サンチーム)

匿名會社にして現社長は Pierre Dupuy(ピエール デュピュイ) で　先代 Jean Dupuy(ジャン デュピュイ) の創立、此人は內閣員たりしこと二回ある。

此新聞は一般に廣く愛讀され。殊に中流以下、又外國にも廣く讀まれる。自ら稱して『全世界新聞中の最大發行』といふ。慥に其實があるやうである。

2 Le Matin 『朝』(ル、マタン)　理事 シュヴネル(元老院議員)

主義ナシ　一般的報道新聞　發行部數　百萬　一枚　十五參(サンチーム)

地方版、午前四時版、及び五時版の三版を出す。五時版は、特に表題の新聞名を赤刷にして(5)の字を赤く出す表題の右端には、今日の天氣豫報、左端には小さき畫にて實物を現はして其品の中央市場(アル、サントラル)に於ける昨日の値段を示すなど、その編輯に頗る氣の利いたるところが多い。倫敦の『タイムス』社と關係ある樣な說もあつたが最近は米國スタンダード石油會社との關係が頗る濃厚なものがあるらしい。

3 Le Petit Journal 『小新聞』(ル、プチ、ジュルナル)　理事主筆 ピション(元老院議員)

主義　共和の色彩濃厚稍急進の謗あり　發行部數　百萬　一枚　十五參(サンチーム)

三版を出すこと『マタン』に同じ。五時版も、新聞名の字なば黑く出して居るが、旭日鷄鳴の畫を赤く刷り込み又巴里版と5の字を赤く刷る。久しく巴里で最大部數を出すを誇りとしたものであるが、最近終に『パリジアン』に壓倒されるやうになつた。通俗化した新聞の元祖で、當時は門番(コンシエルジュ)の新聞と嘲られたこともあつた。

4 Le Figaro. 『ル、フイガロ』

主義　保守『ボナパルト』黨援護　發行部數　七十萬　一枚　二十參(サンチーム)

文學的色彩に富む。一八五四年の創立である。創立者は H. De Villemessant(ウイルメサン)當初から記者に高給を拂ひ、最善を盡さしめて、一擧大新聞の列に入り、今日に至る迄、少しも聲價を墮さいるところを偉とする。巴里五大新聞中の一にして、外國で能く倫敦『タイムス』に比せらるるもの。最近政府筋に關係ある或豪商の手に落ちた。

5 L'Action Fraucaise 『佛蘭西行動』(ラクシオン、フランセーズ)

主義　王黨(ロワイヤリスト)の機關　發行部數　五十萬　一枚　二十參(サンチーム)

政治部理事レオン、ドウデ、及シャルル、モウラス、後者は代議士にして、モウリス、バレスと併稱せらるゝ現代佛蘭西文壇の花形である。『新聞論評』欄ありて、諸新聞社の說を紹介し頗る其要を得て居る。

6 Le Temps 『時』(ル、タン)　政治部理事 エブラール氏　夕刊毎夕四時發行

主義　保守的自由(プロテスタン)　發行部數　五十萬　一枚　二十參(サンチーム)

夙に半官報の稱あり、外交上の問題を重んじ、國外の『ニウス』を揭ぐること多し。英、米、獨、伊、近東、極東の如く、特別の標題を附して列記し、又社會問題、文學藝術、大學及び諸學校、科學、議會記事、商工業等の如く、欄を分ちて記事を整理する。井然とした堂々たる大政治新聞で、昔「ギゾー」は玆で筆陣を張つた。

7 Le Journal 『新聞』(ル、ジュルナル)　理事『ムトン』氏

主義　政見ナシ　發行部數　五十萬　一枚　十五參（サンチーム）

讀者の種類は『エクセルシオル』に同じく、教養ある社會に愛讀される。毎日三版を發行す。一は地方版、他の二は巴里版。皆朝刊である。有名なる文筆の人代議士モーリス、パレス筆を執る。

8　La Liberté（ラ・リベルテ）『自由』　夕刊

主義　保守的共和　發行部數　三十萬　一枚賣　十五參（サンチーム）

報道を主とする新聞。政治文學、財政の獨立的新聞と自稱す。

9　L'Echo de Paris（レコード・パリ）『巴里の反響』　理事及主筆　アンリ、シモン

主義　保守。カトリック國民黨（ナショナリスト）　發行部數　三十萬　一枚　十五參

軍人及び舊教の僧侶間に愛讀される。

10　L'Information（ランフォルマシオン）『報知』

主義　共和　發行部數　三十萬　一枚　十五參

二版を出す。一は政治版、他は財政版。此方に商工業をも含む。新聞雜誌論評欄ありて、世間の新しい論說を紹介す。

11　Excelsior「エクセルシオル」

主義　政見ナシ　發行部數　二十萬　一枚　二十參

主として婦人、教養ある中流、社交界に讀まるるもので、六頁中の正味二頁は、殆んど寫眞版で塡まる。廣告にも寫眞版を入れたもの多い。又巴里に居る外國人にも多く讀まれる。Le Petit Parisien と同一經營の下に屬す。創立以來十一年。

12　Le Gaulois「ゴール」人』（佛人の始祖）　主筆　アルツウル、マイヤ

主義　王黨の新聞　發行部數　十萬　一枚　二十參

文學趣味多し。自ら稱して社會防護、國民的調和の新聞といふ。

13　Journal des Débats（ジュルナル・デ・デバ）『政論新聞』　夕刊毎夕五時發行

多く略して　Les Débats といふ

主義　保守的自由（カトリック）　發行部數　十萬

古く名を知られたる新聞なれど、近來較や振はざるが如し。

14　L'Oeuvre（ルーヴル）『作品』或は『事業』

主義　共和社會主義　發行部數　六萬　一枚　十參

普通の新聞よりも少しく小型である。文學趣味豐かにして青年の間に愛讀される。

15　L'Humanité（リュマニテー）『人道』　主筆　代議士カシン

主義　元は社會黨の機關、現今は『モスクワ』第三『インターナショナル』共產黨の機關

發行部數　五六萬　一枚　二十參

創立者は有名なるジュアン、ヂョウレスで、彼は這回歐洲戰爭の起ると同時に、巴里の一『レストラン』で暗殺された。其後此新聞の勢力に一大變化が來て較や衰退した。佛國人の憎みとする赤露との間に一道の脈絡が通じて居るもの、全然商況欄無きを此新聞の特色とする。

16　L'Éclair（レクレール）『電光』

主義　共和。社會黨　發行部數　五萬　一枚　十參

從來『ボナパート』黨援護の新聞であつたが、現今は彼のブリアン氏の機關である。巴里の新聞中最も廉價なるもの丶一つで、此の新聞は、日本流に右より頁を明ける樣になり、而て第一面と四面とは重要記事で、廣告や「フィユトン」は、二三面にある。體裁に眼先の變つたところのあるを特色とする。

17　La Victoire（ラ、ヴィクトアール）『勝利』舊稱『社會戰』（ラ、ゲール、ソシアル）

主義　社會主義　發行部數　四萬　一枚　十五參

主筆は『ギュスターヴ、エルヴェ』昔は排伊主義の新聞であつた。

18　Paris-Midi（パリ）『巴里・正午』（ミヂ）理事及主筆　アンリ、ベランセエ（元老院議員）

發行部數　不詳　一枚　十五參

毎日正午に發行するもの。今朝の新聞の拔萃頗る要領を得て居る。政治、社會、文學の報道を主とす。劇場及び見物場所の日々の案內極めて精細である。此新聞は代議士ルーシャール氏の經營である。彼は今巴里及び地方で、多數の新聞を持つて居る。『マルセイユ』の新聞、『ル、ラヂカル』の如き其一である。

19　L'Intransigeant（ラントランシジアン）『强硬共和主義者』又『非妥協者』　夕刊新聞　主筆　レオン、ベールビー

主義　共和　發行部數　三萬五千乃至四萬五千　一枚　十五參

報道を主とし、近來讀者を增加したといふ。

20　Journée Industrielle（デユルネ、アンデユストリエル）『產業の日』　主筆　ベルナール、プレシー　一枚　十五參

佛國工業新聞の第一と自稱す。創業八年、實業新聞として異彩を放つ。發行部數不明。

巴里の新聞紙の一々

巴里で發行する英米新聞は今日のところ左の三つである。

21 New york Herald　歐洲版(米)　一枚　三十參(サンチーム)　五萬
22 Chicago Tribune　歐洲版(米)　一枚　五十參　五萬
23 Daily Mail　大陸版(英)　一枚　三十參　七萬

以下の巴里新聞は發行部數大抵三萬以下のものである

24 La Petite République　『小共和國』(ル、プチット、レピュブリック)
25 Le Rappel　『集合太鼓』(ラ、ラッペル)
26 L'Ère Nouvelle　『新世紀』(レール、ヌヴェル)
27 La Libre Parole　『自由談』(ル、リーブル、パロル)
28 Le Démocrate　『民政主義者』(ル、デモクラット)
29 Paris Journal　『巴里新聞』(パリ、ジュルナル)
30 L'Aurêle　『黎明』(ロ!ロール)

31 Le Siécle　『世紀』(ル、シエクル)
32 La Lanterne　『塔燈』(ラ、ランテルヌ)
33 La Patrie　『祖國』(ラ、パトリー)(夕刊)
34 La République　『共和國』(ラ、レピュブリック)
35 La France Militaire　『武の佛蘭西』(ラ、フランス、ミリテール)
36 La Presse　『新報』(ラ、プレス)(夕刊)
37 L'Homme Libre　『自由の人』(ロンム、リーブル)

クレマンソー氏の設立したもので、過激社會主義の新聞である。發行部數　二三萬の間であらう。

38 L'Avenir　『將來』(ラヴニール)

極めて新しく出來たもの。獨立の報道新聞。體裁稍や整ふ。　一枚　十參

右の外尙ほ若干の遺漏あるかと思ふ。今知り難し。あれば著者の疎漏である。

巴里以外で發行する地方新聞の主なるものは

歐米新聞界の秘事

1 Dépêche de Toulouse（トウルーズ） 三十五萬
2 Petit Marseillais（マルセイユ） 三十五萬
3 Petit Provincal（マルセイユ） 三十五萬
4 L'Eclair de Montpellier（モンペリエ） 二十萬
5 Le Lyon R. bublicain（リオン） 三十五萬
6 L'Echo du Nord（リール） 二十萬
7 La France de Bordeaux et de Sud-Ouest（ボルドウ） 五萬 一部 十五參
8 L'Eclaireur de Nice（ニス） 五六萬 夕刊をも出す

以下之を略する。私は日本の新聞當業者のうちに巴里の新聞界をもつと深く研究する人の多く出でんことを切望するものである。巴里新聞界の事情は我國の新聞の革新に多大の參考となることを確信して疑はぬ。

日本

日本

一　我が國の新聞紙

新聞紙は所詮社會の縮圖である。社會の反映である。私の友人藤原君は言つた。『今日人の要求する以上の新聞は出るものでない。今の社會の澆季にある狀態を、新聞がよく顯はして居るのである。大いなる神罰の來るべきを豫想する。大勇者が出でて根本から改革せねばならぬ世情である。』（彼の演說の口調のまゝ）

日本の日刊新聞は、明治三年十二月に發行された、東京横濱毎日新聞を最初とすれば、既に五十二年の歷史を有つ。始めは單に營業の目的であつたらうが、明治十二三年頃から政論時代に入つて、政派の色別けが濃厚になり、廿二三年を以てその頂上に達し、二十七八年の戰役時代から、一般に新聞紙の需要が著しく增加して、漸次純營利的の事業となるに至つた。當初は英佛の新聞に學んだところ多かつたが、最近二十年は、主として米國風を模し、次第に大資本でなければ經營が出來ぬ形勢となり、終に資

本の大小で、大新聞と小新聞との區別が生ずる迄になつた。最近殊に煽情的なる書き振りが流行し、個々の新聞紙に就ても、全體に單調で、且つ紙面に統一が缺けて居るのが多い。此れは一面において通信事業の發展を語るものであるが、又『ニウス』蒐集の範圍が廣汎でない證據とも見られ得るであらう。社說は次第に米國の如く重んぜられなくなつた傾向があり、從つて近來では主として重要なる公社會の話題を捉へ、其題目の今日までの經過と大勢とを叙述するものとして、之を用ふる新聞もある。

一般に物價欄に過多の空間を與へ、又洗錬を經ない『フイユトン』が餘りに多過ぎるかの嫌ひがある。最新の思潮を卜知し得らるべき新しい小說と相對して、時代精神と頗る掛け離れた、古い昔の講談が、今も多數の讀者の喝采を博して居る。殊に其間に挿む、人の首を刎ねたり、腕を切り落したりして居る、非美術的な繪畫は、敏感な外國人の心情を害すること決して少くないのである。要するに日本の新聞界には、未だ耕やすべき餘地甚だ多く、發展の望み盡きないものがあるのである。而して尙ほ喜ふ

べきことは眞面目な優秀な年少な記者が、割合に多く、而して彼等の署名した論說などに、非常に人を感服させるものがある。新聞の記事又は論說に對し、或方法を以て其の記者に責任をもたすることは、新聞を發展させる上に、極めて有力で又有效であるべきを思はせる。

二　新聞記者と讀者の新聞論

局外者として又讀者としての私の日本新聞觀は、或は主觀的にまた獨斷的に陷る恐れがあることを思ひ、茲に公平と正確とを期するため先覺諸氏の意見に聽かうと思ふ夫れも私の要點と考へたところをのみ摘載したのであるから、其の不備の點に就ては筆者及び讀者の諒恕を冀ふのである。

大正十年十月發行『新聞及新聞記者』の社論にいふ。

○囚はれざる新聞尠し　不思議なのは解放を叫ぶ新聞紙それ自身の、甚だしく何者

かに囚はれ居ることである。獨立して權威あるべき言論、自由にして眞實なるべき報道、その總ては怪しくも無形の鎖に繫がれて居る。公共輿論の機關たるべくして、實は或る個人に、或る團體に、又は或權威に縛られざるは莫い。有體に申さば、何者にも囚はれない新聞を、今の日本に發見するは至難だ。そこで何よりも大切なことは、新聞自體の解放だ。

○新聞は廣告主が作る　當節の新聞は、殆んど除外例なしに、廣告主の力で成立つて居る。卽ち廣告料收入が、各社の絕大の財源であり、激烈な部數販賣戰は、たゞ廣告收入を增さんがための手段に過ぎない——如何に一たび多くの販賣部數を有しても、總じて資本主義を攻擊する新聞は、資本家であるところの廣告主から、廣告を『ボーイコット』され、忽ち經營に支障する內外の實例に徵して明かだ……

○最初の出發點の誤謬　紙上の論評、勞働記事などを讀むと、盛んに新思想を以て任じ、政府を嘲り、資本家を呪ふなど、思ひあがつた筆鋒の多いのに、社是を其反

對に行るが何故か。親の心子知らずの記者の仕事に、經營者の目の屆かぬ點もあらう經營者への反撥を、製作の上に託して居る記者もあらう。然し經營者は知つて居る知つて默認するは何故か。一は時代の多數に迎合すること、一は逆に資本家を脅威しようと欲するからだ。內實は急進主義の新聞であればあるほど、經營者は資本家と接近し近似し、遂に經營者自身立派な資本家となる……活字のみは大きく猛烈すぎるほどの改造歌を亂舞しつゝある。讀者は之れを信じた。今では何と思つて居るか。將來何時まで我慢するだらうか。

○石を擲ち得るは誰ぞ　斯ういふ事は、青年記者の良心を困憊痲痺せしめる。時には幹部の命に憤つて、新聞界を去る士もあるが、大多數は上長を倣つて一層墮落する近くは醜狀暴露の東京市疑獄に連座して、歴々の各社から、如何に門並の犧牲者を出した事か。又各社記者の集團たる某記者倶樂部が、共謀○○した事實は尙事新しい……抑も本源を淨めずして、末流を淸うするは不可能だ。彼等可憐の犧牲者に

石を擲つ前、先づ麻を着灰を被るべきは誰ぞ。

此の雜誌は、都下の各新聞記者の一團體が發行して居るところのものである。此れが日々の新聞紙を創造しつつある眞面目なる記者の、眞面目なる叫びある。之を讀んで私は悲しいやうな、賴母しいやうな、一種異樣の感じに打たれる。而して何となく別項にある『米國新聞の悖德と「眞鍮の合ひ札」』を繰返へして觀るやうな感じがしてならない。

近い頃の時事新報公論壇に見えた『新聞界の現狀』は何を觀察して居るか。

○新聞紙の現狀　國民の文化生活に於ける新聞の任務の重大は言ふまでもないが、我國の大多數のものは所謂迎合の心理に浮動してゐるのである。また社說の論及する範圍も極めて狹少であつて、文化の最大要素たる、藝術、宗敎及び哲學等の一般思想運動に對しては、殆んど全てが無力の理狀である。一部の新聞では、所謂大家の寄書によつて、自らの知的用意の缺陷を補つてゐるけれども、その寄書の選擇の

標準となつてゐるものは、博士とか大家などいふ名義の影であつて、統一ある思想的確信に基くものではない。この事は過般、バートランド、ラッセルが來朝の際都下の大新聞等は、氏の寫眞を掲げてまで『貴重』なる紙面を費しながら、氏の哲學思想の內容には毫も觸れ得なかつた事に證明せられてゐる。箇々の具體的事實に就いて、政策として批評指導も無論忽諸に附すべきではないけれども、單に經濟學的、或は政治學的諸分岐の上にのみ、社說を限るならば、それは新聞自らがその文化使命の最重要の點から離れて、技術家化せんとしつゝあるに外ならぬのであることを注意せねばならぬ(立木丘)

昨年冬同じ時事新報公論壇は慶應大學教授として盛名ある小泉信三氏の左の議論を掲げた。

○新聞の壓制　今の世に必要なることの第一は、恐らく新聞紙の壓制を制する機關を設けることであらう。所謂官僚軍閥、又は大政黨の橫暴の許す可からざることは

固より說を俟たぬが、併し是等のものに對しては、兎に角之を制すべき何等かの反對勢力がある。獨り新聞記事の橫暴に至つては、殆ど之を制し得るものがない。當代の文豪某博士は嘗つて嘆じて、人間の價値が活字によつて定められる今の世の中で、新聞記者を片端から怒らせるのは、自分で自分の顏に泥を塗るやうなものだと云はれた。私は新聞の殊に三面記事、又は短評漫言の類の筆鋒を見て、記者が所謂名士に對して、包括的に私怨を抱いて居るのではないかと疑ふことが屢々ある、幾多の人は故なくして廣い世間の前で、殆んど日々面に泥を塗られて居るのである。

別の某博士は、嘗て新聞は嘘許りを書くと公言して、大に新聞紙側からの攻擊を受けた。嘘ばかりと云ふのは勿論、云ひ過ぎであらうが、然らば眞實許りを書くかと云へば、多少見聞の廣い人ならば、多くの之に對する反證を提示することが出來るに違ひない。構へて嘘を吐けば、固より言語道斷であるが、假令意識して虛構の事

は書かぬにしても、當然すべき努力を怠て、不實の報道を傳へるのは、その許す可からざる事に於て、彼れと多く擇ぶところはない。若しこれが新聞又は新聞記者の生存競爭の爲め、已むを得ざるものだと云ふならば、斯る不正競爭に對して、商人の不正競爭に對する以上に制裁を寛大にすべき理由は何處にあるか。

併し默過することの出來ないのは、不實の報道の製作許りではない。これと同じく或はこれよりも更に憎むべきは、人の秘密の破廉恥なる摘發である。一般世人の爲めに害は兎に角、益は勿論なく、たゞ無責任なる座談の種となるに過ぎぬ事で、書かれる當人に取ては無限の不快を感ぜしめるやうな記事が、日々紙上に現はれる。秘密を條件として話した事が、平氣で(而かも意味を取違へて)紙上に掲げられた經驗は多くはないが私にもある。

若し知人間に於て、人の私事を摘發吹聽して廻るか、或は約束した秘密を公表して恬として恥ぢないものがあれば、其人物は齒するものがない。斯の如き私人として

の非行が、新聞記者としては何故に正當の行爲となるのか。私人に對する同じ道德律を、何故新聞記者に適用してはならぬのか。右述の如き感を抱くものは、決して私一人ではあるまい。若し本紙の寄書欄によりて、一般新聞記事に依て受けた迷惑を、多少なりとも輕減する機關が設けらるゝならば、其功德は實に偉大なものであらう。(小泉信三)

前中央新聞主筆高木信威氏が、本年一月號の『新聞及新聞記者』に新聞紙に對する『希望八項』を述べられてある。その要領は

(一)調子を高くしたい　新聞紙は公的機關であつて社會教育を施す地位にある點から見ると、その新聞紙の論調なり記事の性質なり、更に推擴めて考ふると、その掲載廣告の性質なりが、その目的に適應しないときは、その調子が低いといふことが可能的と爲る。社會の現組織を文化に導く點より離れて、反つてこれを茶毒するが如きは、その議論なり記事なりが、如何に深遠らしい學說から出發するも、それ

を此にいふ調子の高い意味には解されない。要するに新聞紙の調子といふのは、その新聞紙全體の有する道義的觀念の高低に依て定まる。

(二)淺薄を避けたい　議論にしても事實の報道にしても、淺薄輕薄であらぬやう努めたい。風敎美俗を傷ふことは勿論避けねばならぬ。

(三)社會及び人の正しき位置を認めたい　人の人としての正しき位置を認めて積極的にはこれがために鼓吹するところあり、消極的にはこれを擁護するやうにあつて欲しい。

(三)社會面に對する希望　道義の大綱は古往今來動かるべからざる一法則として根本的に存在し、唯だ適用が進化して來たのに過ぎないのであるから、これが破壞を敢てするやうな思想の鼓吹、及び事實の奬勵は極力避けねばならぬ。同時に矯激な行動を煽るやうな仕事は、勿論排斥せねばならぬ。そして吾人の疑ふのは、新聞紙を通じて見た社會には、善行美擧が甚だ少い。殆んど無い。社會と人とを正しく

見たら報道すべき善行美擧がいくらもあらうと思ふ。何故新聞紙は警察材料の如き事のみに重きを置き、他に隱れた善事を報道しないか。

(五)學問奬勵の意味が欲しい。

(六)倶樂部制を改むる機會に接したい　各官廳に存在する倶樂部の現狀よりすれば、官廳の發表物は時間を定めて勵行し、突發事件のときは、面倒でも社へ電話で通知する親切を取れば、(差止め事項のあるときは、夜中でも電話で通知する事から考ふれば、實行は困難であるまい。)現今のやうに、記者が無駄な時間を費やして、能率を低減して居る通弊は自ら除き得るのである。

各社共點に氣附いて居ることゝ思ふが、何故協同して實行しないのか。是非協同的に新聞社ばかりでない各官廳共々に商量の程を望ましい

(七)頁數の競爭よりも實質の競爭を

(八)寫眞版及び挿畫の整理は如何　小說講談の挿畫の中には隨分何うかと思はる

るのが少くない。新聞級も社會に引摺られてばかり居らずに、少しく社會の先頭に立つ覺悟があれば、此にいふ挿畫の如きにも、少し意を用ひては如何なものかと考へられる。一々指點せよといはれては困るが、隨分時代錯誤といつて善いほどのものが發見せらるゝは事實である。

新聞の讀者たる側から新聞の改善を切望する者は、此の高木氏の『希望』事項に、尙ほ幾項かを附け加へ得よう。記者自身の自己教育と、その勉强努力、進んでは經營者が彼等に對する經濟的待遇の改善などが夫れであらう。我等は記者及び經營者の側からモット眞摯な、眞面目な意見を聽いてみたい。多くの讀者の中には、或は當局者の知つて居る以上のものを知つて居る者があらう。本書の世に出たのも、畢竟その改良の方法に就ての議論や、研究を促す端緒ともなれとの希望に過ぎない。思ふに此國はまだ非常な若々しさを有つて居る。行詰つた澆季は、老朽ちた國々にのみ來る。世狀は新しい轉回の途にある。國民殊に若い人々の自覺と努力とによつて、此國は必ず救は

れる望みがある。今日の新聞を讀む者は、獨逸人の言つた如く、其見る新聞を選擇して、自己教育の實例を示なさねばならぬ。之は何處までも眞理である。

然し國民の大多數は、義務教育を終へ、其後は主として新聞紙によつて教育せられるのであるから、自己自身を教育して吳れる恩人たる者を批判し得る能力は、その教育する人が與ふるほどの教育に由つてのみ穫らるるものでない。茲に到れば吾等は又論を轉じて國民の教育論に移らねばならぬ。然し夫れは餘りに煩瑣である。故に私は之れ以上ここに夫れに就いて述ぶることをしない。唯だ現代の我國に於て新聞經營者の負ふ責任の頗る重く、從つて甚だ恐るべく、愼むべきものあることを、繰返へし言ひ置きたい。

三　廣告領域の擴張と變更

歐米の新聞と比べて、日本の新聞の最も著しく見劣りのする部分は、其の廣告欄で

ある、廣告を一種の新聞記事として見やうとする我等の眼には、第一その形式が頗る選練されて居ないことと、其の多方面が缺けて居る點が眼障りになり、甚だ飽き足らず思はれる。私は思ふ社會が新聞で表現さるゝ如く、新聞は廣告によつて表現さるゝものである。日本の新聞紙の記事に變化少く、甚だ劃一的の傾きあるは、既に前項に指摘したところである。私の此の見方に間違ひがなければ、廣告が多方面を缺いで居ることも、亦當然の結果であるとも言ひ得らるるであらう。

元來廣告なるものは、如何に其の形式が變らうとも、其の方法は極めて少いものである、廣告文を巧みに書いて出しても、之を味ひ讀む者は、不幸にして廣告に油斷をしない廣告の網にかゝりにくい賢い都會人である。面白さうな長い話で、讀者を釣り込んで行き、お仕舞ひ口に、肝心な目的を云ふやうな廣告は、必ず賢い讀者から割引されて讀まれる損がある。然し此樣な廣告法は、昨今歐米ではもう全然捨てられて了つた。今の廣告の秘訣は、人を驚かすことと、唯大聲で怒鳴ることであると或人は云

つた。何にせよ廣告なるものは、昔から人を退屈させるところの反覆を以て其唯一の方法となし、較もすれば人に嫌はれ厭はれながら、人の眼に訴へ、心に訴へるといふ如き、極めて原始的な、而して平凡な方法を因襲して、今日に及んで居るものである。元々此樣な無趣味な變化の乏しいものを、昨今の日本の諸新聞が、主として雜誌、書籍、酒、白粉、賣藥、足袋の如き或る限られたる源泉から得て居るのである。殊に雜誌の大廣告に至ては、夫れが最近の現象でもあり、且つは多額の費用を要する上から、果して永續して行かれるものか如何かといふ極めて不安な感じが、之を依賴する雜誌社と之を受くる新聞社との雙方にあるらしく見ゆる。一歩を進めて論ずれば、其安不安の問題よりも、更に之がためには書籍、雜誌の賣價を高めることになり、其の結果、文化の普及を阻害するものとして世の非難を免るることが出來ぬのである。

歐米に於ては、書籍と雜誌の新聞廣告は絶無ではないが、甚だ稀れである。良書は各新聞の文學欄によつて紹介され、而して其の批評は常に公平にして立派である。公

平にして立派な批評を下すことによりて、新聞は自己の名を昂め且つ其新聞自身の販路を擴げ得るのである。現今の如く文運の隆盛なる日本において、新聞が書籍及び雜誌の廣告から養はるることが當然のことのやうで、實は甚だ不當然不公平な不思議な現象である。然し之を恒久の現象なりと測定するは、恐らく何人も躊躇するところであらう。若し國民の經濟狀態が、今よりも尙ほ惡變すれば、此種の廣告は最先にその影響を蒙らねばならぬ、而して必要上漸次減退若くは終熄せねばならぬ。昨年十月の『東京朝日新聞』の鐵筆欄に左の寄書が見えた。

○廣告制限運動　雜誌『實生活』十月號に高島米峰氏の『新聞廣告の大きさを制限せよ』といふ一文が載つてゐる。僕それを讀んで大いに共感同鳴した。僕も出版業者の一人として、貧弱なる借紙人の一人として、社會問題研究生の一人として、滿腔の誠意を以て此の運動に參加する。

詳しい事は同文を讀んで頂くとして、聊かこれを日本の精神的文化といふ方面から

考へると、日本の思想界が朝三暮四、節操なく定見なしといふのは、實は思想界と稱せられるものを、新聞雜誌業者と出版業者とが作つてゐるからであつて、呉服屋が流行を提供してゐるのと同一轍である、マルクス主義の雜誌社が親鸞主義の雜誌社より財力(廣告力)が强ければ、日本の思想界はマルクスが勝たやうに見えるのである。

諸君！諸君は毎日の新聞の廣告面を眺めて實際以上に思想界と世相の紛亂を感じないか。精神的の苦惱を感じないか？近頃の雜誌廣告と書籍廣告の刺戟的な文字と大きな活字の行列はどうだらう？吾々玄人は其の誇大な目次を一瞥したゞけでもう雜誌を買つて見る氣も失せるのだ。それ程吾々は廣告性神經衰弱に罹つてゐるのだ

更にこれを廣告主と販賣店と讀者との三角關係側から觀察すると、そこに投機的出版界の救ふべからざる諸種の頽廢的傾向が看取せられる。

良い書籍良い雜誌が必ず大きな廣告をするのではない。寧ろその反對である場合が多い。小さな珠玉が大きな瓦礫の蔭に其の光を失つてゐるのだ。こゝに日本の思

想界の資本的暴力化がある。精神文化の頽廢と悲觀がある。

米峰氏の意見は新聞の廣告面を耕地整理をするやうに區劃して廣告の最大限を定めよといふのだ、此の利益は資本主義の掣肘と小資本の擁護にある。文化の健全な助成にある。

『朝日』は權威ある新聞である、新聞事業か營利事業でないならば日本の思想界の爲に出版界の爲に率先して此の事業を斷行する事を慫慂する。（西村陽吉寄）

茲に云ふ『實生活』の高島米峰氏の論文は之を要約すると

『新聞廣告の大さを制限せよ　高島米峰』

○地代が高い。家賃が高い。それもなか〳〵借りられない。ア、住宅難、宅地難さても横暴な地主と家主。……とまでは、大抵、誰にも異存はあるまい。

ところが、新聞の廣告面はどうだ。依然として、賣藥、化粧品、大出版業社、大雜誌社と言つたやうな、貴族富豪成金にも比すべき連中が、土地の買ひ占め、家屋

の借り占めに、いよ〳〵ます〳〵横暴振りを發揮して、聊かも、近所隣りの迷惑を顧みないどころか、同居でもして暮さうと言つたやうなものゝためなんどには、毫も同情を表しない。それもよい廣大なる宅地を持つて居る貴族や富豪が、それを、山林や畑と稱して、脫稅して居るのと同じやうに、一頁大半頁大の廣告をする廣告界の貴族や富豪は、非常の割引をさせて、極めて廉價に紙面を使用して居るのである、るが、五行十行の借紙人は、無割引の言ひ値で、借紙料を徵收せられるのである、地所や家屋に對しては、借地人同盟とか、借家人同盟とかいふものさへ組織され、政府の方でも、借地人や、借家人を保護するやうな法令も作つて呉れ……と言つても勿論、その恩惠に浴して居る譯ではない。……るとか言ふことだが、この新聞王國の當局は、さうした低級な仁政をさへ施さうとしないのみならず、寧ろ、貴族、富豪、成金の横行跋扈を歡迎して居るといふ狀態、さうして、そこの微小なる借紙人は、同盟を結んで、自己の立場を擁護しようとする勇氣さへ、持ち合せて居ない

……のか？

そこで、僕は、新聞王國をして、その國策を樹立せしめようといふのである。その國策といふのは、卽ち、一頁を十六區劃に分割し、一日一種一區劃を最廣限度とし、一種一區劃以上の廣さを有する廣告は、これを拒絕するといふことにするのである。云々

最近になつて、略ぼ之と同じやうな議論や希望が、他の新聞等にも現はれたのを見たが、既に新聞が一の營利事業であつて、現實に世間の需要がある間は、商策としては自ら數歩を退き、一の廣告の空間に、自ら或る制限を立つごときは、卽ち自分から其事業の門戸を狹める事になり、各社一致の申合せにても出來れば兎も角、我から率先して之を決行する如きは、其最も難んずるところであらうとは、局外でも十分に想察せられ得るところである。之は或は注文する方が無理でなからうかと思ふ。

書籍と雜誌との大仕掛けな廣告の外、日本の新聞紙にのみ見る特質的な廣告の種類

は火事見舞と葬式の廣告である。『近火御禮』なる滑稽的文句は、近來全く見えなくなつたが、夫でも類燒又は近火御見舞御禮の廣告は少くない。而して之が悉く自發的のものと思はれない節がある。或は又醫院や辯護士の如き『プロフエッショナル』なものの廣告は、一般の讀者に何の感興を與へ得るものであるか。若し何物かを與へ得るならば、夫れは寧ろ狹い小さな或る便宜であつて、一時、或る特定の狀況の下にある人々を益することがあつても、普遍的一般的に汎く便宜を與ふるものではない。廣告はその依賴者の便益以外、廣き意味での一般讀者の便益と興味とをも其の目安の中に入れ置かねばならぬ。偏した廣告は、廣告としての價値が少ない。此の目安が固く守られて、廣告が報道の一部となり、從て記事の一部となり、汎く讀者の興味を買ひ得ることになるのである。

葬儀の特別廣告は、著者の知れる範圍では、獨逸と墺太利とに於て我國ほどに濫用されないが、屢ば新聞紙上に黑枠附で發見することがある。夫れも相當社會に名を知

られた人々に限る、然しながら山縣公や大隈侯の如き大人物には、適用されないのが普通である。其他の諸國では、日本の新聞の『案内』欄の樣なところ、卽ち米國で Deaths 英國で Deaths 又は Obituary 佛蘭西では Deuil 欄に、極めて小さい活字で、而かも一定した空間に略ぼ一樣の形式を以て廣告されるのである。それが極めて多數で、時としては新聞の半頁を埋めることもある。無論新聞社は、若干の料金を徵する。英國では一『ギニー』を普通とするやうである。東京の新聞紙は、葬儀廣告に對して全然割引を許容しない習慣がある。之には相當理由のある事でもあらう。然し此種の廣告は將來一層安價になり、一層出し易くなる事によつて、却て新聞社の收入を增し、且つ一般讀者に多大の便益を與へることになるのである。

日本に於て發行する英語の日刊新聞中、第一に指を屈すべきは、東京の『デヤバンアドヴアタイザー』であらう。之は米國の『レッヂヤー、シンヂケート』と稱する集團の中に屬して居るものである。其の體裁、其の他の點に、酷だしく費府の『パブリ

ック、レッジャー』の面影を見せて居るのは、卽ち其の爲めである。此の新聞の開業當時經營の主腦者たる人が、自ら新橋から須田町までの商家を、軒別に訪問して、廣告の蒐集に努めたといふ、之は著者が先年、『ガゼット』の一記者から聞いた話である。何にしても同紙がその編輯法の巧妙なこと、其廣告の比較的多方面なこととは、多くの讀者の賞嘆措かざるところで、其成功は決して偶然ではないと思ふ。其の努力勉强の點は、大に我が新聞當業者の刺戟となり、參考となるべき事項と思ふ。

今戰後の英米獨佛墺諸國の新聞廣告を通覽すれば、英米に於ては戰前と餘り著しい變化を見ないが、獨墺の兩國では、地所家屋の如き不動產の賣却と、職業を求むる人の特別廣告の多いのが頗る目立つ、而して佛伊の二國では、料理店、珈琲店、劇場、賣藥、殊に恥づべき種類の病氣の藥劑の、廣告が頗る多い。以上は無論一時的のもので恒久の現象でないことは明かである。而して昔も今も歐米各國を通じて、最も多く廣告を利用する營業者は、如何なる種類のものかといへば、それは主として常に百貨

商店。食料品商。呉服店。服裝品店。自動車製造者。料理店。珈琲店。汽船會社。各種の機械店。各種の興業物。等が其主なるものである。

歐米の新聞の細字紹介欄には、種々雜多のものを網羅して居るが、特に我等の眼に物新しく感ぜらるるものは、結婚と出生の披露である。而して獨墺では此以外に、日本の葬儀廣告同紙に、獨立した特別的形式で、屢ば結婚の廣告が掲げられるのを見る。人の不幸に際して廣告料の割引を拒絶する如きは、稍や沒義道に聞ゆることもあらうが、之を慶事の廣告に適用した場合、其の懸念は較や少くならうと思はれる。

昨年十一月の雜誌『現代』に、大阪毎日新聞社長東京日々新聞社長本山彥一氏の『新聞紙の發展と其の使命』なる論文が出て居る。其一節に、

『歐洲戰爭が勃發しましてから、暫く日本も不景氣風に打たれて居りました、がそれが反對に段々輸出は盛になる、貿易がすゝんでくると云ふことゝなつて後は、內には商工業が振興され、所謂船成金、鐵成金、銅成金などが簇出すれば、從つて工夫、

職工に至る迄收入が潤澤になつて參りました、これが又新聞紙の增加を齎らしました。然しこれは單に紙數の增加のみではなく、戰爭時代の好景氣は諸種の會社を起しましたのと同時に、新聞紙面に廣告をするものが非常に殖えたのであります。諸君も御承知の通り、新聞を經營致しますのは單に新聞紙を賣上たからというて、其經費は償はれるものではありません。これは皆廣告料を集めて、それで新聞紙の缺損を補ふのでその殘りが所謂純益なのであります。その廣告料が各新聞社共殖えて參りました、一例を申しますと、今日は見る影も無い土地會社などが、當時盛んに株券の募集をしました、そしてそれ等の新らしい會社は、廣告料金の定價通り割引の特約なしに、ドシドシ廣告を掲載したのであります。從つて新聞社も純益が多くなつて來ましたので、之を新聞の改良、乃至通信機關の改善、將た社員の優遇などに費すことが出來ましたから、餘程各新聞社共、其都會にあるものと田舍にあるものとを問はず、其基礎が鞏固になつた樣であります。之は誠に文化事業の爲に慶すべき

ことであらうと思はれます。』云々

本書獨逸の新聞論にある如き（一八三頁）所謂『泡沫會社時代』（グリユンデルツアイト）の有頂天（タウメルヤール）の歳に、新聞によつて行はれたところの『不純な親切』（ウンラウテルリーベスアーンスト）が、當時の日本に有つたか無かつたか、夫れは我等の知るところでない。唯だ本山氏の此言によつて、都鄙の新聞紙が、齊しく彼等泡沫會社の恩惠に浴して、社の經濟を裕にし、諸種の改善を行ひ得た事實を知り得るのである。何にせよ大分古くから日本の新聞界に取つて、頗る都合のよい一の慣例が行はれて居る。夫れは都會の堂々たる大會社、大銀行は勿論、左までにない地方の會社銀行までも、汎く各新聞に、一年兩度のその決算報告を廣告に出すことである。

讀者試みに米國の代表的新聞、『ニウヨウク、タイムス』や、『ヂヤーナル、オヴ、コムマース』や、又英國のものでは、『タイムス』や、『マンチエスター、ガーデアン』などを飜して見よ。其廣告に、資產負債表などを出したものは、全然無い譯でないが、極めて稀れなことを發見するであらう。且つ其樣な場合は、殆んど優先株發行、新株募集、或は拂

込徵收などの時に限ると云つても善いのである。彼の新聞紙の一頁、又は半頁を占領して、其盛んなる營業振りを吹聽する一種の『プロパガンダ』とも見らるゝべき大廣告は、寧しろ米國式に屬するもので、之によつて讀者否寧ろ觀者は、決してその廣告主に對して尊敬の念を增加する理由を與へられない。而して此種の廣告は、廣告主から言へば、概して消極的な廣告であつて、新聞社にのみ利益があり、廣告主に取つて左程の利益がない、而して一般讀者に取つては、更に利益も興味もないことは、如何なる人も一見して心附くところである。要するに日本の新聞廣告は、現在において頗る其の多方面の點に缺けて居る。未耕地がまだ甲地乙地に殘存して居る。其既に鋤犁の入れられたところも、まだ深くは耕されて居ない。研究と努力との大に加へらるべき餘地は確にある。日本の新聞業は、此點に於も、亦決して行詰まつては居ないのである。

四　國際的通信機關の諸問題

本書獨逸新聞論の章に於て、我等は戰爭中獨逸が如何に其國際的通信機關を遮斷せられ、如何に不利益な、困難な地位に置かれたかを知ることが出來た。世界の一隅に僻在する我が日本は、この關係において今如何なる狀態にありや。我等は平和を愛好し之を尊重する理由から、特に此點について注意を拂ふの要がある。

先づ海底電線は如何。日本は總體において僅に四千餘海浬を有するのみである。而して小笠原島を經て米領『グワム』島に通ずる一線を以て、米國桑港『マニラ』上海線に接續する。此の米國線は、『コムマーシアル、パシフヰック、ケーブル』會社の所有に屬するものである。又我國と支那大陸との間は、臺灣福州間の一線だけが、我が手にあるのみで、他は悉く外國會社の『コントロール』するところである。而して本邦と歐洲大陸とを接續するものは、那威(ノルウエー)大北電信會社の掌握するところである。無線電信の方は、稍や强力な裝置が內地にも出來たが然し一般的通信には使用されて居ない。支那の方には、漢口、青島にも相當なものを有して居るが、近く上海に出來る米國の無線

裝置は、是等よりも遙に强力で、日本の電波の如きは、之が動いて居る間、到底其用をなさぬものであるといふ。目下支那にある列國無線局の數は日本十一、米國五、佛國四、英國二である。通信傳達の機關は是の通りであるが通信其ものの現狀は如何、

支那人は自國の新聞よりも、より多く外國新聞を信用する癖がある。彼等は商賣以外の殊に政治上、寧ろ政權に關する諸問題には、相互に信用せずして、相互に猜疑を擅にするを常とする。此れは其の國民性に由るものであらうが、若干同一の傾向が我日本人にもあることを自覺し、自ら警めねばならぬと思ふ。由來支那人は日本の新聞紙を見て、自國の事情を知るのが多いといふことを聞く。此れは支那に善良な有力な新聞の無い爲めでもあらう、兎に角日本の新聞紙は其發行の日から大抵四五日を經ないうちに北京上海に達する。而して又日本新聞の支那に關する論說及び記事の緊要なるものは、直ちに電報をもつて支那の各地に通信されるのである。我等は日本の新聞紙が自覺するよりも、遙に多く支那人が日本の新聞を重要視して居る事實を知らねば

ならぬ。

H、G『ウエルズ』は、支那の文化の發展を阻害したものは、全く其の國字であると言ふ。我國の幸田露伴博士は、支那が少くとも其の本部を、四千年の長き間、實際多少の動搖はあつても、一度も解體すること無しに、一箇の國として今日まで持續し來たのは、一に其の國字の恩惠であると謂はれた。此二つの議論共に當れりと私は思ふ。古來支那には國境なるもの無し、又從て國家なるもの無しとの議論が近頃出た。之も亦眞理である。其の國境のない處に、歪みなりにも或る結束の存在する跡を尋ね得るといふのは、全く其の文字の御蔭である。之は支那の話である、我日本に取つても我等は、如何に威張つても、此の支那文字の束縛から當分脫し得る望がなささうである其議論は他の機會に讓り斯く我等は支那に對し、同種同文といふ歐米人に比し、非常な利便と强味とを與へられながら、今日十分に其利益を働かせて居ない。茲にも我が新聞の自覺と努力と奮勵とを期待すべき點が横はつて居る。

北京と天津には七個の日刊英字新聞ある。內二個は邦人の經營するもの、而して他の五つは云ふ迄もなく悉く排日的のものである。また外人に由て發行せらるゝ漢字日刊新聞が二つで、其一は邦人の經營、他の一は極端な排日的のもので、之は米國實業家の機關である。別に中美通信社と稱するものが電報通信を掌つて居る。之れも亦米國人の支配するものである。

上海には英字日刊新聞が五つ、其三つが甚しく排日的である。漢字日刊新聞は二つで、其一は米國實業團の機關で頗る排日的、他は英人の機關で、此方は排日の傾向無しと云はれて居る。日本のものは漢字日報一と、漢字通信が一あるのみである、此外各地殊に南支那に多くの英語佛語等の週刊新聞がある、其中目立つて有名なものは上海の『ノースチヤイナ、デーリー、ニウス』、之に次ぐは『ミラード、リヴヰウ』である。之は米人トーマス、ミラードの經營するものである、彼は元からの新聞記者であつて今日は支那に於ける米國の利害を代する主要なる役者となつて居る。先年巴里講和會

議の時には非公式に支那全權附の發表局長に任せられ、當時支那の全權顧維鈞等の思ひ切つた行動は、殆ど皆彼の方寸から出たものだといふ評がある。而して一たび米國に渡つては、上院議員の中に極端なる排日說を流布し、その對日感情に大變化を起こさせたのは著明な事實である。這回、華盛頓會議には、陰に陽に支那のために健闘したことは言ふ迄もない。

今は故人となつた極東通モリソンは、永く倫敦『タイムス』の支那通信者として有名な人であつた。又極東に關する數種の著書で名を揚げたブラントは、今倫敦に歸つてをるが、彼も長く支那に居て、支那と日本とを研究を續けた人である。現在は、『デーリー、テレグラフ』の北京通信員たるシンプソンが、在支英米新聞記者中で牛耳を取つて居る。彼は排日の傾向を有つた人である。

舊冬支那を訪問した、例の『ノースクリッフ』卿が『タイムス』に送つたその極東觀の一節に曰ふ。『支那の日刊新聞は漸次其數を增加しつゝある。然し支那新聞の多くは

財閥と日本とに追從するものである。支那にも新聞の檢閲がある。夫れは十一月北京に起つた銀行の取附け騷ぎに、政府が禁令して、內外に通信を出させなかつた如き其一例である。獨逸は今現に伯林から極東へ、毎日缺かさず無線電信を以て盛んに『プロパガンダ』を送りつゝある。或は新聞に補助金を與へ、或は活動寫眞の『フヒルム』を送付するなど、皆此目的の爲めである。現に漢堡(ハンブルヒ)で印刷された夥多の小冊子が、昨今極東の諸港に散布されて居て、夫れはノースクリッフの世界漫遊は、英國『プロパガンダ』の目的であるといふことを書き、之によりて英佛、英米、英印、英埃、また日英の關係を割かんとして、必死の力を注ぎつつあるのである。我等英人は獨逸に對して、今も戰時と同じ大いなる危險を感じつゝあるものである。』と

獨逸人は言つて居る。戰時中飛行機の上から獨逸の塹壕線に、獨逸帝國に不利益な記事を滿載した多數の新聞紙を撒布したのは、ノースクリッフ卿其人でなかつたか、彼は昔も今も、此先幾度內閣が代つても終始英國政府の『プロプガンダ』大臣である人で

ないか。と其の卿は今斯の如く頻りに極東『プロプガンダ』のことを繰返へし言つて居る。我等日本人はかれら獨英人のなすがまゝに任せ此形勢を雲煙過眼視し此問題を忽諸に附してよいのであらうか。

滿洲其他支那の各地に、日刊の邦語新聞がある。此の外露領、南洋、布哇、北米の各地にも若干あるが、何れも同胞相手の言はゞ地方的のものであつて、廣い舞臺で較や有力なものは一二を除き、未だ出ないやうである。米國桑港の『日米』及び『新世界』の二つは、そのうち較や出色のもので、前者は一萬以上を刊行するといふ。

現今日本の新聞紙の外報の九割を供給すると稱せらるる、在東京國際通信社（コクサイ、ニュース、エゼンシー）の總支配人ラッセル、ケネデー氏は、以前永く米國『アッソーシエーテット、プレス』の極東通信を擔當してゐた人と思ふ。彼は今『ルーター』社の『エゼント』を兼ね、日本の國際通信を海外に送り、同時に海外の通信を受入るる仕事の衝に當つて居るのである。其言に據れば今より十一年前の一九一一年には、日本の新聞に一個月五千語の外國電報を供

給するに過ぎなかつたが、昨今それが五萬語に上り、十一年間に正に十倍するに至つたと云つて居る。一個月五萬語の受信は、之を歐米諸國間のものに比べやうとしてもそれは比較にも何にもならぬ數字である。而して一方其の日本から歐米へ送る語數は幾何であるか。私は今之を知る材料を缺いて居る。然しそれとても決して一個月五萬語に上ることはあるまい。現在東京に居て、歐米の新聞及び通信社を代表して居る人々は、英國三或は四人。米國四或は五人。佛國一人。他に若干の獨逸人がある。

ケネデー氏は、多年日本に滯在しながら、日本語に通ぜざる不便を嘆息して居る。之は決して外國人たるケ氏のみの問題ではない。其實、吾等日本人自身の問題であるのである。國字に累はされて居る日本語は、之が學習に多大の不便を外國人に與へて居る。斯くして國字は國際的に進展して行くこの國の國勢を阻害すること實に夥しいのである。

邦語新聞は、邦語が漢字に支配されて居る間は、其の國際的の關係に就いても、自

然に歐米に疎く、支那に深く且厚かるべきは當然の事である、而して若し日本の新聞紙が、國外に發展し得る見込があるならば、それは支那を措いて先づ他にない。此點は甚だ心細い、然し考へやうによれば又有望でもある。若し『英文每日』より更に一歩進んで『漢文每日』『漢語朝日』となれば、どれほど日支兩國の文化、延いては兩國國民の幸福に貢献するところが多いか知れないのである。

五　日本新聞紙の將來

日本新聞紙のため、其の經濟的關係から、先づ第一に考へさせられるのは、ドウしても矢張り國字の問題である。

漢字が我が國民教育に、如何に多大の障害となつて居るかは、既に二三十年來大方論究し盡されたことで、茲に夫れを繰返へすの要はない。近來其の使用數を、或は三千に或は二千に制限せんとするが如き企てあるは、頗る宜きを得たこと丶思ふ。然し

夫れは唯だ何處まで行くも應急的の方策で、少しも、根本的に問題を解決するものではない。又邦文『タイプライター』は向後如何に改良を加へても、其運轉の迅速、其取扱の容易な點其他に就て、到底 世界の文化國に通用される『アルフハベット』式のものに比較することが出來ぬ。漢字を使用する我が新聞紙は、歐米のものに比し、その出發點から非常に不利益な地位に立つて居る。而して其の不利益は殊に經濟上の不利益を以て最とする。

例を英米の中流の新聞紙に取る。新聞の用ふる一語は、平均『アルフハベット』六字を組合はせたもので、一行九語、一欄二百行、一頁七欄、一部十頁乃至十二頁、或は夫れ以上であるから一部の新聞紙中には、七十五萬乃至百萬字が排列されて居るのである。之が製版(術語は知らず、植字して から印刷さるゝ迄の手順)は、百人以下の人數で、之を六時間乃至八時間で仕上げねばならぬ、無論植字は手でする場合の計算である。手の植字は、一時間千二百乃至千五百字を拾ひ、且つ列べるのは、英米でも餘程熟練した者でなければ出來ぬ事

であるといふ。

此の不便を除くため、數年前から『ライノタイプ』が使用され、今日では米國は無論英國でも新聞といふ新聞は、此機械の幾臺かを備へ附けないものが無いといふ。之は今日まで發明された機械のうち、最も人間の頭腦の働きに近いものであると云はれて居る。其構造は恰も『タイプライター』の如く、指頭を以て『ボタン』を押せば、溶解した鉛は之を受けて、一語一語の活字を造り、夫れが一行一行と、次々にひとりでに出て來て、操縦者の左側に在る函(ケース)の中に、自分自身で排列するやうに造られて居る。而して勿論使用する字母は、大小數通りあるのである。若し前記の如き十或は十二頁位の新聞ならば、四五臺の機械で事足り、一臺の操縦は、一人の人を要するのみである獨逸のものは『タイポグラフ』と云ひ、獨逸人はその精巧を誇るのである。

印刷機は將來尙ほ益進歩したものが出て來るであらう。然し我國の新聞も、羅馬字が一般の使用とならぬうちは、『タイピライター』と、『ライノタイプ』の有効な使用は全

然不可能である。而して此二つが使用されないうちは、新聞は見す〳〵時間と經濟との非常な損失を忍んで行かねばならぬ。幾年の後になるかは知れぬが、日本は如何しても漢字の羈絆から脫出せなければならぬ。之は新聞紙のみの問題でない。實に日本將來の文化の最大問題であるのである。

戰爭は新聞紙の賣れ高を增加することは、各國の事例が之を證明して居る如く、日本も此の四半世紀の間に、日淸日露の兩役、及び歐洲大戰に參加して、新聞業の上に一大飛躍の機會が與へられた。國民は汎く之によりて新聞紙を讀む興味を敎へられ、各新聞は何れも賣れ高を激增し、一般經濟界の活況は、新聞廣告料の增收を來らした戰爭は斯くの如く、一面に於て非常に新聞の進歩を助けたのは著明なる事實であるが他の一面に於ては、甚しく新聞を退歩させたのも事實である。

如何なる點に於て戰爭が新聞を退歩させたかと言へば、夫れは『ニウス』蒐集の方法を、邪路に求めるやうにならしめたからである。戰爭中は我國でも一切の戰報は、悉

く檢閲を要したのみならず、一切の戰況は陸海軍の官省で發表するもの以外、殆んど他から之を得る途が無かつた。而して之を得るためには、各社の記者ば不斷に其の官省に出頭して居らねばならぬ必要があつた。『ニウス』の本源を探求すべく、或はその發表する新聞種を受取るべく、茲に來集する記者のために、其の溜り場が設置された夫れが即ち高木氏の議論に上つて居る記者倶樂部のことである。今現に東京の一官廳の構内に別種の記者倶樂部が四個あるものがあると言ふに至つては、如何に多數の記者が、之がために用ひられて居るかゞ分る。其處の役所の吏員等が演ずる些末の行爲などを書き立てて、忙はしい讀者の目に『又か』との一種不快の感じを與へるのは、蓋し彼等記者の閑時の手すさびで、云はゞ其の副産物の一であらう。現代の我國新聞紙の記事が、甚しく劃一的になつて、新聞は本來皆な所謂特種(トクダネ)のみで成立つて然るべきものであるに拘らず、夫れが官廳及び通信社の發表するものを、主なる材料とする關係から、斯くの如く一種特種なる語を以て言ひ現はされねばならなくなつた其の原

因を溯つて行くと、竟に戰爭に歸着することになる。

日清日露の兩戰役は新聞紙のみならず、又日本の憲政の進歩をも妨げた。憲政停頓して、政論が振はなくなり、從て新聞紙の政論も、自然に威力を失ひ、政治教育の機關に大なる缺陷を生ずるやうになつた。之が爲め地方自治の精神は、何時まで經つても徹底せず、代議政體の根本が今に至るまで少しも確立して居ないのである。一體新聞紙が政治論よりも實業上の諸問題を重んずるのは、米國風の思想である。我が國の新聞は、茲にも亦米國風を學んだのである。新聞の取扱ふべき事件としては、讀者の利害關係が、成るべく廣汎なることを其の必要條件とする。政治の如きは其の共通利害の最も廣いもので、政治論が單に少數特定の人物にのみ目安を置くことなく、國民多數の休戚を論ずるものである以上、人間生活の至高の問題として、新聞紙の最も力を入れねばならぬところである。然し從來の政論は、餘りに抽象的にのみ傾いた遺憾がある。今後の新聞の政治論は、最も手近かの方面、即ち町政、區政、市政の問題か

ら出發し、人々をして政治に興味を有たしめつゝ、國民の政治思想を涵養して行かねばならぬ。之が新聞本來の使命でもあり、又慥かに其の新しい活路でもある。」

日本で最大の發行部數を出して居るのは大阪の新聞である。大阪には毎日五十萬から七十萬までの間を刊行するものが二つあるが其精密なる數は、各社の秘密とするところで知ることが出來ぬ。東京は大阪よりも個々の新聞紙の數が多く勢力が分割されて居て、一個の新聞社からの發行部數は大阪よりも較や少く、二十萬から三十萬までの間に在るもの僅に二つであるといふ。此の中若し大阪なる一の社が、東京なる其一を併せ經營して居るとすれば、此の兩新聞紙を併せた社の有する勢力は、實に恐るべきものであると云はねばならぬ。或人は日本の新聞紙の日々の總發行高を五百萬、支那のそれを五十萬と算定した。既に記載した如く、米國の夫れは千五百萬、獨逸の夫れは二千二百萬であり、而して巴里市のみの夫れが約八九百萬の見當であるとすれば日本の新聞界は、まだ〳〵發展の望みがあり寧ろ非常な有望な前途を有つて居ること

が明瞭になる。

斯くの如き巨大の部數が、毎日刷出さるゝ當然の結果として、新聞事業に關聯して用紙供給の問題が起つて來る。本年一月廿五日の『ヂャパン、アドヴァタイザー』が公けにした、東京に於ける某新聞社と某製紙會社との間の交渉事件の如きは、早晩次次に必ず起り來るべき性質の問題であらうと思ふ。獨逸のスチンネスは、國内に廣大な森林を買收し、之から自己の新聞に必要な紙を供給して居る。ノースクリッフは加奈陀に、又米國の新聞『トラスト』の主なるものも、亦加奈陀に森林を所有し、盛んに自家用の用紙を製出しつゝあるのである。用紙供給の問題は、日本新聞業の焦眉の大問題とならんとする時代は、現に眼前に、近づいて來た。英米の實例から稽へると大なる新聞業者は今のうちに沿海州あたりの森林に着目せなければならぬ。

夕刊新聞は、米國に於て頗る盛んであるが、英國では、例の保守的なる國民性から取引所の相場などに注意する人人の外、餘り之に重きを置かないといふが、それでも

『スター』や、『イーヴニング、ニウス』の如き立派な夕刊新聞がある。巴里では、『タン』、『ジュルナル、デ、デバ』及び『リベルテ』の如き著名な屈指の大新聞が、夕刊一方の新聞であり、獨逸でも、夕刊新聞は漸次其數を增し、勢力を增加しつゝある。是等の諸國の反對に、日本に於ては、大抵の夕刊は朝刊新聞の延長であつて、獨立した夕刊新聞に未だ大勢力を振ふものが出て來ない。之は何と云つても『報知』の創始以來、まだ日が淺く、且つ成るべく早く印刷に着手する必要から、締切りを急ぎ、編輯に力を入れる餘裕の得難い爲めでもあらう。然し私は其の販賣方法の缺けた點が、其の不振の最大原因であると思ふものである。而して其販賣の方法は夕刊新聞のみならず廣く一般の新聞紙を通じての缺點と思ふ。

夫れは新聞紙の一枚賣りの問題である。私の想像に據れば、東京大阪の如き大都會でさへ、街頭の一枚賣りは、其の月極購讀の部數に比し、何割といふ少數のものであるやうに見ゆる。極言すれば普通の朝刊新聞の一枚賣りは、月極の二割を超ゆるもの

さへ稀れであらしい。日本の新聞の如く、主として通信種又は官廳から得た材料を以て紙面を埋むる間は、甲乙丙と多くの新聞を併讀する必要は、甚だ意義が乏しきことになる。何れの新聞も殆んど各自の特性なるものを發揮せずして、其の劃一的共通的材料を着色潤色する方法のみが、強て特性的と云へば言ひ得らるゝ如き今の狀態では讀者範圍の擴張が、非常に困難に成り行くのは當然の事であり、而して之が激甚なる競爭を一層激烈ならしめ、其極常に新聞相互の殺し合ひに終るのも亦當然の事であらねばならぬ。

何れの新聞紙も、悉く自家一流の特色を具備するやうになれば、其の實質を廣告する手段としても、新聞の一枚賣りが從つて盛んにならねばならぬ。紐育、倫敦、巴里の地下鐵道の入り口にある、『ニウス、スタンド』の每朝の雜沓は、東京や大阪では、到底想像も出來ぬ程の光景である。更らに巴里では、町々の要所に其箱店があり、『車店』があり、山の如くに積まれた各種の新聞紙は、瞬く間に賣れて行く。顧客は其の堆

積によつて、其の新聞の最近の聲價をト知することが出來る。新聞の競爭は、其實質の競爭となり、經營者も編輯者も、全力を傾注して新聞紙面の改善の工夫をする。斯くして新聞は益發展し、益讀者を增加し益其勢力を扶殖して得るのである。

日本のやうに新聞賣子が新聞紙を紐で結へたり、屑籠の樣なものに入れたりして、肩に引掛けるだけを持つて居るのみでは、其賣り盡し得る紙數にも自ら限りがなければならぬ。第一之れでは顧客の買はんとする心理を捕捉する力が足りない。かの米國西部の諸市で見るやうに、地べたの上に置きならべるのは、日本の如き泥土の露出した街路では不似合の事である。せめては市俄古紐育などで見る、床店でも設ければ、賣子も顧客も、非常に便利を得るやうになるに相違ない。私は特に新聞紙の販賣部當局者に對し、この一枚賣り擴張といふ事の工夫研究を勸めたい。

日本の新聞の特色は、俗にいふ三面記事である。近來夫れが較や改善されたやうであるが、今日なほ我が新聞の大なる汚點たる事實に少しも變化がない樣である。ノー

スクリツフ卿は、日本の新聞紙はその品質概して優等であるが、唯その顯著（ノートリアス）（惡しき意味での顯著）なる恥辱（スカンダル）であるところの其第三頁（サードページ）が邪魔になると言つた、我等は三面記事を、今の儘にして置いて、他に如何なる改善を加へても、夫れは此の汚點を償ふに足るものでないと思ふものである。米國の低級な新聞紙を除いて、假令一部分にもせよ、此樣な露骨な、而して思切つて調子を低くした書き振りをして居る新聞は、世界何れの國にも見出し難いのである。噫眞に顯著なる此の汚辱！を如何にせん。

新聞紙の第一面を、廣告や案內欄に使用するのは英國風である。東京の多數の新聞も既に之を模倣して居る。米國東部の新聞、及び佛獨墺伊の新聞は、政治、經濟、外交の最も重要な事項は、皆此第一面に載せ、夫れが新聞店頭に並べられた時、之を以て直下に讀者の心理を捉へることを考へて居る。思切りの善い米國西部、殊に加州邊の新聞は、其第一面が即ち日本の所謂三面記事で充され居る。我日本の新聞も、第一面に今の三面記事を載するも善いであらう。一の新聞の特有の品質を最も明瞭に、且

つ最も迅速に讀者の目に訴へるべく人目につき易い第一面に之を刷出することは、販賣の競爭に最上の手段となるであらう、而して公衆は之によりて容易に其の品質上の判斷を下す利益が與へられるのである。

日本新聞に見る廣告には、其の意匠に多大の缺點がある。全體を通じて靜穩なる調子が缺けて居る。奇警が過ぎて、苛竦で、何處かとげ〳〵しい處が多くある。一言にして蓋へば餘りに刺戟が多くあり過ぐる。廣告のこの調子も、米國西部邊の新聞其儘を移して來たかの感がある。思ふに之は獨り廣告者のみの罪ではない。新聞記事の調子、新聞全體の氣分が、すべての廣告をして斯〳〵あらしむべく導いたのである。米國新聞の弊所のみを模した我が新聞界は、又最先に此種の不快な摸倣からも脱せねばならぬ。廣告の改善に就ても新聞經營者及び記者共に全然無關係の地位に立ち居るべき筋合のものではあるまい。我が新聞界將來の競爭は、其の墮落の競爭でなくて、其の改善向上の競爭であるのでなからうか。新聞賣價の改定、其用紙の改良、何れも甚だ

可なり矣である。唯新聞記事の品質の改善に至つては、論ずる人の餘りに多くして、實行する人の餘りに少きを憾みとする。眞理と正義に志す大勇者は、何時世に出て來るのであるか、さりとては待遠しい。

最後に我等は、我が新聞界に非常な偉力ある一大武器が、最近與へられたことを見遁がしてはならぬ。夫れは英國新聞界に彼の教育條例が與へたところの夫れにも比すべき大事件である。夫れとは何であるか。普通選擧の問題である。之れは將來日本の社會教育、政治教育に至重至大の關係を有つ大問題で、又之に達する道程は我國の新聞紙に一大飛躍を與ふべく約束する斯界未曾有の大機會である。然しながら精巧なる武器を操縱するには、細心精緻の頭腦を要する。茲に新しい新聞活躍の舞臺が開かれ爰に新しい新聞試練の時代が來た。之を思ふ時、私は一種の喜望と一種の戰慄とを禁じ得ない。

——了——

吉野川そのみなかみを
たつぬれは葎のしづく
萩の下露

（松翁道話）

大正十一年十月五日印刷
大正十一年十月十日發行

歐米新聞界の秘事
定價二圓

著作權所有

著者　船尾榮太郎　東京市麹町區麹町三丁目四番地
發行者　土屋泰次郎　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍第一工場
印刷者　吉田松次

發行所　東京市麹町三丁目　振替東京七八四七
丁未出版社
電話九段六六〇

丁未出版社は。健全なる道德的の立場にあつて、政治・教育・文學・科學及び宗教を解說したる著書を發行致してをります。故にその出版物は、みな國家・社會及び、個人に活ける精神を與へる良書のみであります。

文部省認定書

古今の英雄俊傑其人に乏しからずと雖も以て則とすべく、倣ふべく而して過無からんもの、リンコーンの如きに稀なり。彼は造物主か路機い岩塊を鑿り、密河の水に滌きつ、これを粗刻し、之に生命の息を吹き入れて人としたるかの概あり。先つ之を米國に與へて、其の殆と壞亂せるを濟ひ、且つ四十萬奴隷の鐵鎖を斷たしめたる後、更に之を世界に與へて人類の儀表たらしめたるものなり。彼の賤農より起りて、無私質撲なる大常識を以て遂に大國の元首となりて國難を拯ひ人道を正しくしたるは、立志傳中、如斯く偉大なるもの他また其の儔を見す。其の人格は渾然として玉の如く、一點の微瑕、留めず、著者前後五年の日子を費やし、參考渉獵本書を成す、想ふに邦文に成れるリンコーン傳中、如斯く彼の面目を活躍せしめたるは無からん乎

櫻井鷗村著（十五版）

リンコーン物語

菊判半截・五號字五三四頁
定價壹圓七拾錢・送料八錢

東京振替麹町市東京七丁目三八四七
丁未出版社
電話六九〇六番

文部省認定書

野邊地天馬著【定價壹圓五拾錢・郵送料十錢】

幼年お伽五十八種

金の鈴

四六版上製
四號活字假名付
三百十二頁
口絵三色版

本書は、尋常二・三・四年位のお子様たちに讀み得らるる、無邪氣な可愛らしいお噺や、勇ましいお話、また、自然界に對して美妙な感興を湧かしめる様なお噺を聚めました。

また、理科的知識をも愉快に扱つて、動植物愛護の精神をも說きました、從つて、堅苦しい教訓談は一つもありません、けれども、凡てのお噺は、悉く教訓を包んでゐます、そして非教育的なものは全くありません。

發行所　東京市麹町三丁目　振替東京七八四七　丁未出版社

文部省認定圖書

野邊地天馬著　四六判上製十二ポイント假名付　三百五十四頁・口絵三色版

母を慕ひて

◎定價一圓五十錢・郵送料十錢◎

本書は、母子の情愛を中心にした兒童文學であります。優美な物語や、雄々しい傳記の中にも、大抵、母子の心持が現はされてゐます、そして多くは假作でなく、事實または著名な物語から採つたのであります。材料は各國の事蹟に求め、世界十五ヶ國に亘りて、三十のお噺を收めました。

發行所　東京市麹町三丁目　振替東京七八四七　丁未出版社

名溪會讀物調査部推薦

易平文行實忠說所

東京女子醫學專門學校長
東京至誠病院長　吉岡彌生著

私の實驗したる安産と育兒

◈四六判三百頁上製・定價二圓五拾錢・郵送料十錢◈

小兒料の權威たる、著者は其の二十年間の研究と實驗とを發表されました、著者は學究に忠實なるうへ御自身で子供を養育されたる經驗もあり、母としての見識をも有して居られます、此書は、專門的でありませんから、誰にでも分ります、獨斷的でありませんから、少しもアブナけがありません。

發行所　東京市麹町三丁目　振替東京七八四七　丁未出版社

ユーモア十篇

笑の哲學を含める高尚なる諧謔趣味の文學

慶應義塾大學教授　佐々木邦譯
作原　ウォルター・ケーマ

定價壹圓五十錢・郵送料十錢

文部省認定圖書
好評四版
四六判上製
二九四頁
口繪一葉
寫眞版

◈事務家が頭の疲れた時にそれを轉換して休めるために讀む慰安と休養の文學です。

◈家庭で阿母さんと子供たちが一緒に讀んで面白がることのできる清らかな趣味の小說です。

◈學生が暑中休暇のとき避暑地などに持つて行くによい伴侶で肩の凝らない屈强の讀物です。

◈轉地して靜養する人達が讀めば非常に精神の爵を散ずる諧謔味のある書物です。

◈原作者には高い理想と人生に對する批評眼あり讀む度毎に色々の諷刺を與へる面白き作物です。

東京市麹町三丁目　振替東京七八四七　丁未出版社

ト2/N-3P

Life of Washington

ワシントン物語

野邊地天馬著

四六判上製・三二二頁・十二ポイント
活字假名付・口繪一葉・送料共二圓十錢

服從と眞實、之れがワシントン家の家訓でした。ジョヂ・ワシントンは此の家訓を完全に實行した人です。斯かる偉人の傳記を少年少女に讀ますことは、どんなに其の人々の將來を幸福にすることでしようか。

發行所 東京市麹町三丁目 振替口座七八四七 丁未出版社

卷